殿河内遺跡発掘調査報告書

昭和61年3月

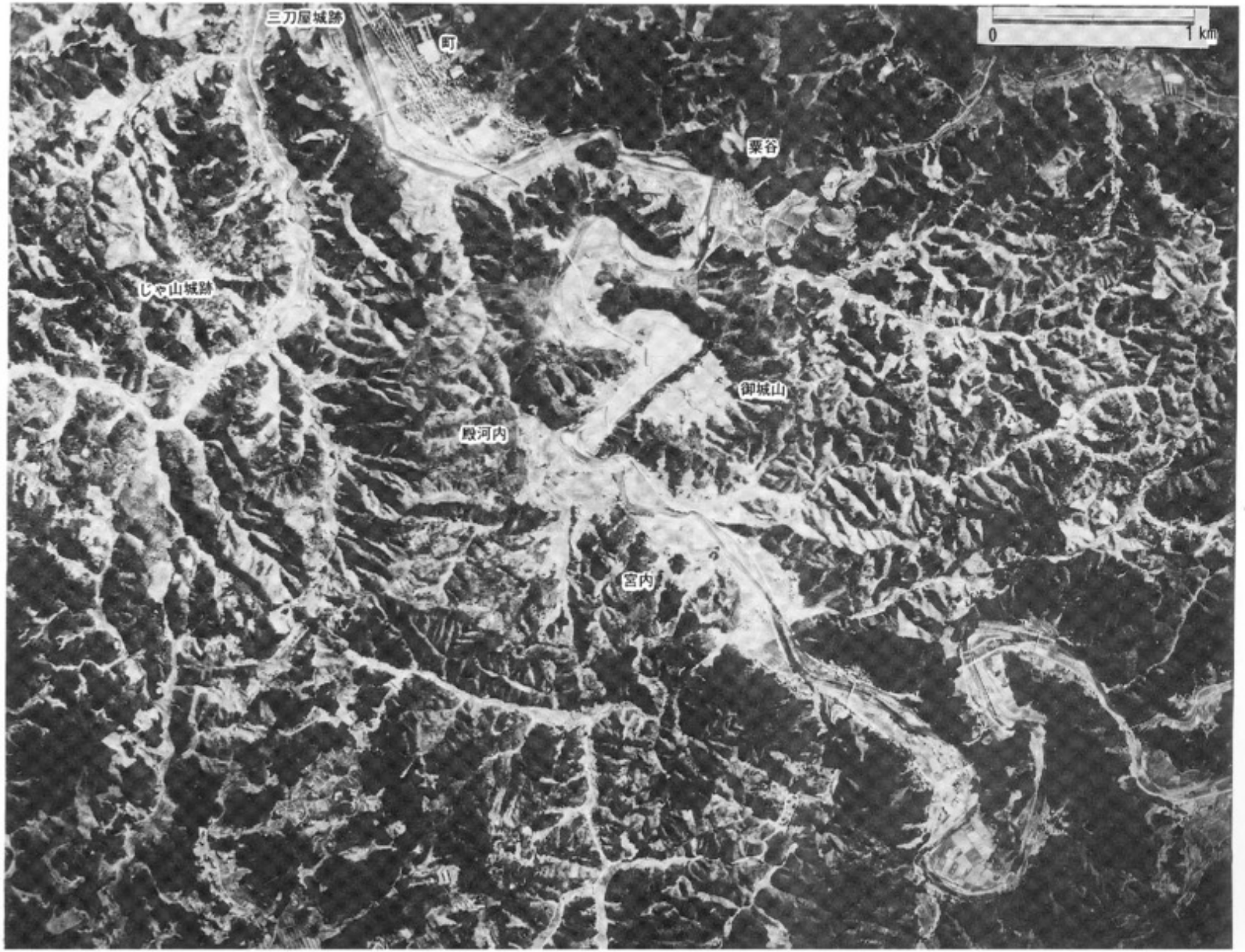
島根県

三刀屋町教育委員会

三刀屋町の遺跡III　正誤表

頁	行	誤	正
例言P2	6	妹尾　正	妹尾　治
挿図目次	16	方寺砦跡	法寺砦跡
1	26	妹尾　正	妹尾　治
1	28	大田	太田
1	29	山根	鳳城山
1	35	方寺砦跡	法寺砦跡
1	38	方寺砦跡	法寺砦跡
13	3	方寺砦跡	法寺砦跡
13	48	205方寺砦跡	205法寺砦跡
13	挿図	第16図　方寺砦跡見取図	第16図　法寺砦跡見取図
13	8	方寺砦跡	法寺砦跡

御城山城跡鳥瞰図


三刀屋城跡
町
栗谷
じゃ山城跡
御城山
殿河内
宮内
0
1 km

序

本町は、山陰と山陽を結ぶ交通の要衝に位置し、古くから拓けたところで、縄文時代を代表する宮田遺跡、松本第一号古墳など著名な遺跡を数多く有しております。

中世においても、尼子十旗のひとつ三刀屋氏の本拠地であり、その居城三刀屋城跡およびじゃ山城跡は、当時を今に伝えるすぐれた文化財として高く評価されております。

殿河内遺跡は、その三刀屋城跡に隣接し、三刀屋氏の一族宇佐輔景の拠った城との伝承をもつ御城山城跡を指呼の間に仰ぐところにあり、その居館跡に比定されている遺跡であります。

近年、中国電力㈱による水力発電所の建設に伴って進入道路ができるなど、今後も開発の可能性があるため、本年度国・県の補助金を得て発掘調査を実施した次第であります。

事業の実施にあたりましては、島根県教育委員会・調査指導の諸先生、地元関係各位などたくさんの方々のご指導ご協力を賜わり、無事に調査を完了することができました。

これを契機に、文化財に対する関心が一層高まるとともに、この報告書が広くみなさまに活用していただけることをねがってやみません。

最後に、調査員、作業員の方々をはじめお世話になりましたみなさまに厚くお礼申しあげ、刊行のごあいさつといたします。

昭和61年3月

三刀屋町教育委員会

教育長　古瀬　明

例　　言

1. 本書は昭和60年度国庫補助事業として、昭和60年6月10日から昭和61年3月31日まで実施した殿河内遺跡発掘調査の報告である。

2. 調査体制は次のとおりである。

事業主体	三刀屋町教育委員会（教育長　古瀬　明）
事務局	三刀屋町教育委員会　次　長　福間末年
	三刀屋町教育委員会　次長補佐　永塚久守
調査担当者	島根県文化財保護指導委員　杉原清一
調査指導・助言	藤岡大拙　（島根女子短期大学助教授）
	村上　勇　（島根県立博物館学芸主任）
	勝部　昭　（安来第一中学校教諭）
	村田修三　（奈良女子大学助教授）
	蔦岡法暲　（島根県教育委員会文化課課長補佐）
	西尾克己　（島根県教育委員会文化課主事）

3. 調査作業にあたって次の方々の協力・援助を受けた。記して謝意を表する。

富田精一、富田　勇、富田　修、日野　正、妹尾　治、宮田一夫、森田　博、河江静夫、小池守夫、名原和穂、御城山自治会

森山　崇、田中迪亮、広沢英雄、名原光義、妹尾忠雄、加藤陽一、藤原友子、的野克之（島根県立博物館学芸員）

三宅博士（島根県教育委員会文化課）

4. 本書の執筆編集等は杉原清一、永塚久守が担当し、藤原友子がこれを補助した。なおⅠ・Ⅵ章は永塚、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ章は杉原、Ⅶ章は杉原・永塚の分担執筆である。

5. 出土陶磁器については村上　勇氏の助言を得た。

6. 挿図中の方位は磁北を示す。なおこの地の磁気偏角はN6°40′Wである。

7. 本書において「殿河内」は大字名を指すもので、当該遺跡の名称は特に「殿河内遺跡」を表記して区別する。

目　　次

序　文　　三刀屋町教育長　古瀬　明

Ⅰ　調査にあたって …… 1

Ⅱ　調査の方法 …… 2

Ⅲ　発掘調査 …… 7

A. 第1調査地点　B. 第2調査地点

Ⅳ　出土遺物 …… 12

古式土師器　須恵器　土師質土器　中世的陶磁器

近世近代陶磁器　その他

Ⅴ　周辺部の中世的状況 …… 17

後山(御城山)　太田　下津原　本郷及び上殿河内

日倉神社について

Ⅵ　城跡と荒神塚 …… 20

御城山城跡　殿河内奥城山　清水の荒神塚　石塔

Ⅶ　文献等にみる「殿河内」 …… 33

地名の変遷「殿河内」への支配

Ⅷ　ま と め …… 37

挿 図 目 次

図 1　位置図 …… 巻頭

図 2　殿河内遺跡付近地形図 …… 3

図 3　発掘区域実測図 …… 4

図 4　断面図 …… 6

図 5　掘立建物(SB-1) 柱穴(SX-1)　9

図 6　掘立建物(ＳＢ－２) …… 10

図 7　掘立建物(ＳＢ－３) …… 11

図 8　掘立建物(ＳＢ－４) …… 11

図 9　殿河内地区踏査図 …… 16

図10　日倉神社獅子頭 …… 20

図11　御城山城跡実測図 …… 22

図12　殿河内奥城山略測図 …… 24

図13　清水荒神塚構図 …… 25

図14　清水荒神塚埋納壙 …… 25

図15　清水荒神塚出土品(1) …… 26

図16　清水荒神塚出土品(2) …… 27

図17　清水荒神塚出土品(3) …… 28

図18　(参考) 岡田山古墳裾出土 … 29

図19　椎ノ木上宝篋印塔 …… 30

図20　正福寺石塔 …… 31

表紙写真 … 御城山地区航空写真

巻頭図版 … 御城山城跡鳥瞰図

巻頭写真 … 殿河内区域航空写真

図1. 位 置 図

I　調査にあたって

「殿河内遺跡」は、三刀屋町大字殿河内1007番地ほかに所在する遺跡である。

先年、中国電力㈱による水力発電所進入道路の建設に際して発見されたもので、付近に所在する「御城山城跡」に関連する館跡と推定される。

この一帯は、今後も開発の可能性があるところから、事前に遺跡の性格、範囲等を確認するために、本年度国庫補助事業として発掘調査を実施したものである。

調査の概要は次のとおりである。

まず、館跡推定地であるが、ここは現に畑地として耕作されており、作付の関係から時期的に制約を受けながらの作業となった。そこで、はじめに作物（牧草）の収穫と次の播種との間を縫って部分的な試掘を行い、ある程度の見極めをつけたうえで、のちに改めて面的に拡げていく方法を採った。地権者・耕作者の協力を得ながらの調査ではあったが、民有地でしかも発掘を伴う調査のむずかしさを痛感したところである。

次に、御城山城跡については、実測（一部略測）により郭の配置等の解明を行った。

また、周辺に点在する中世的遺構についても可能な限り調査し、さらに文献・地名・伝承等の側面からの考察も加えた。中世の城郭にからむこの種の調査においては、当該の遺跡だけではなく、広く周辺にも目を向けながら、相互の関連性や時代背景を探っていくことが必要と考えたからである。しかし、今回の調査によってすべてが明らかになったとは、とうてい言い難い。これを契機として地元をはじめ各方面に、より深い研究の動きが生まれてくることを念願するものである。

なお、例言でもおことわりをしたが、「殿河内」は旧村名であり現在は大字名でもある。したがって遺跡名との混同を生じるおそれがあるので、単に「殿河内」とした場合は集落の名を表し、遺跡名を表す時は「殿河内遺跡」として両者を区別した。

最後に、本事業の実施にあたってご指導ご協力を賜った方々に、厚くお礼申しあげる次第である。

Ⅱ　調査の方法（図1）

発掘調査を行った地点は丘陵先端に近い字原崎（畑地）であるが、御城山城跡や付近の地勢との関連も重要と考えたので、次のように調査を進めた。

6月10日～7月10日の調査作業は、発掘地点を含む丘陵上畑地のほぼ全域にわたる約80×70mに10m間隔の方眼区を設定し、農作物の作付等の部分を除いてトレンチ調査を行い、主として遺構面の検出と遺物の散布状況を把握することとした。

また、この調査地点から西～北方向の御城山と、その麓部を含む一帯の地形測量をトラバースを組んで行った。

そしてトレンチ調査の結果から約160㎡部分について全面発掘を行った。飼料作物栽培地であり、収穫から次の播種までの間（10月14日～11月5日）において行ったもので、日数的制約から最上面の上層である耕作土は重機を用いて排土し、作業効率をはかり、調査後の11月5日に埋め戻しを終了した。

発掘した遺構と深く関連すると思われた御城山城跡については、山地のため林樹の落葉をまって11月9日から11月18日まで、主として平板を用いて城郭の実測を行った。

この間において、ほぼ同時代かと予測された字清水の荒神塚とその出土品について調査した。また県立博物館的野学芸員に随行し、地域内に所在する日倉神社の古棟札や所蔵品についても見学した。

さらに一帯の小字地名を調べ、大字殿河内地内で他にも「城山」があることを知り、現地踏査を行ってこれを確認し、12月上旬この縄張りの略測量を行った。

図2. 殿河内遺跡付近地形図

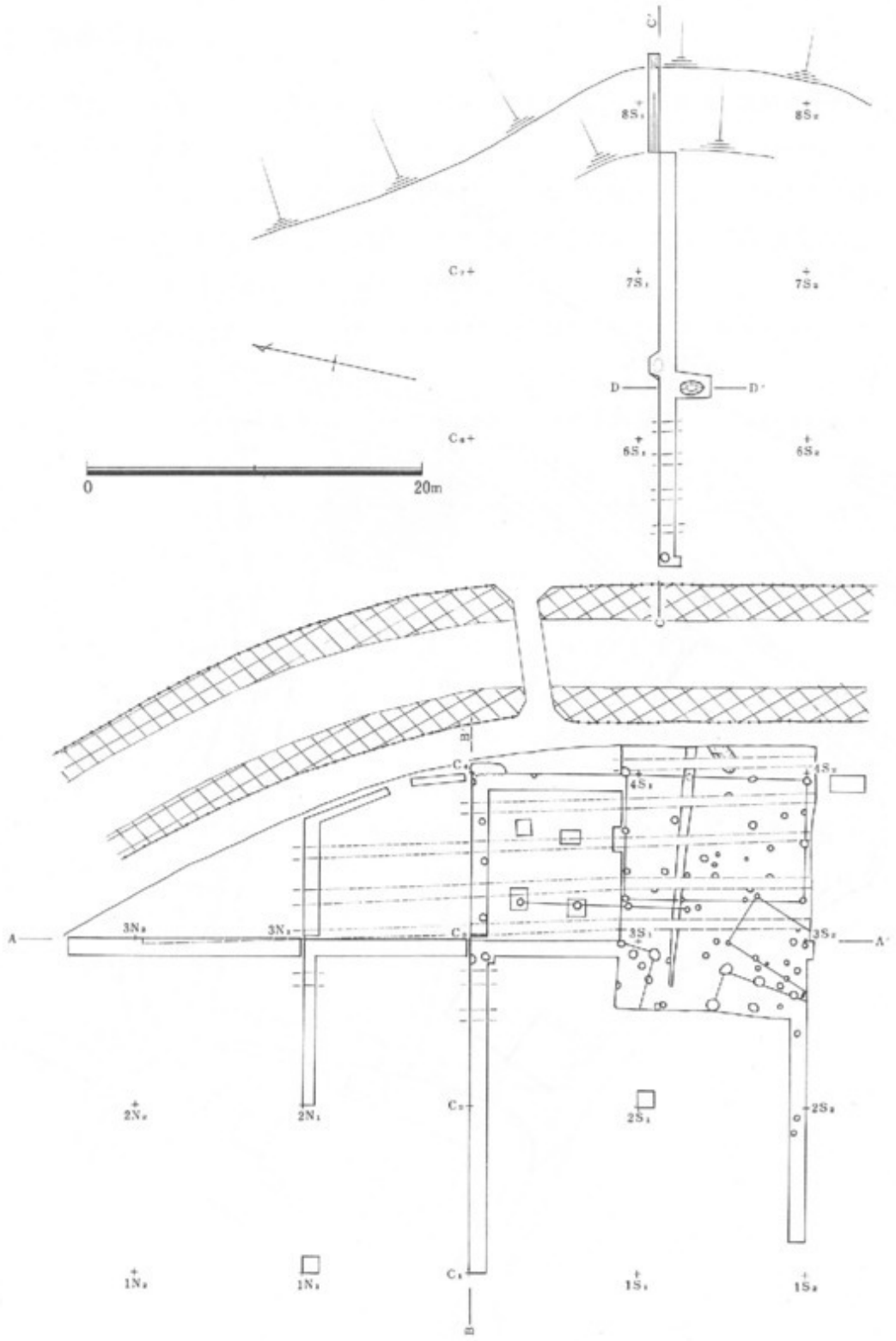

C
8S1
8S2
C7
7S1
7S2
D
D'
C6
6S1
6S2
0
20m
B
C4
4S1
4S2
A
3N2
3N1
C3
3S1
3S2
A'
2N2
2N1
C2
2S1
2S2
1N2
1N1
C1
1S1
1S2
B'

図3.　発掘区実測図

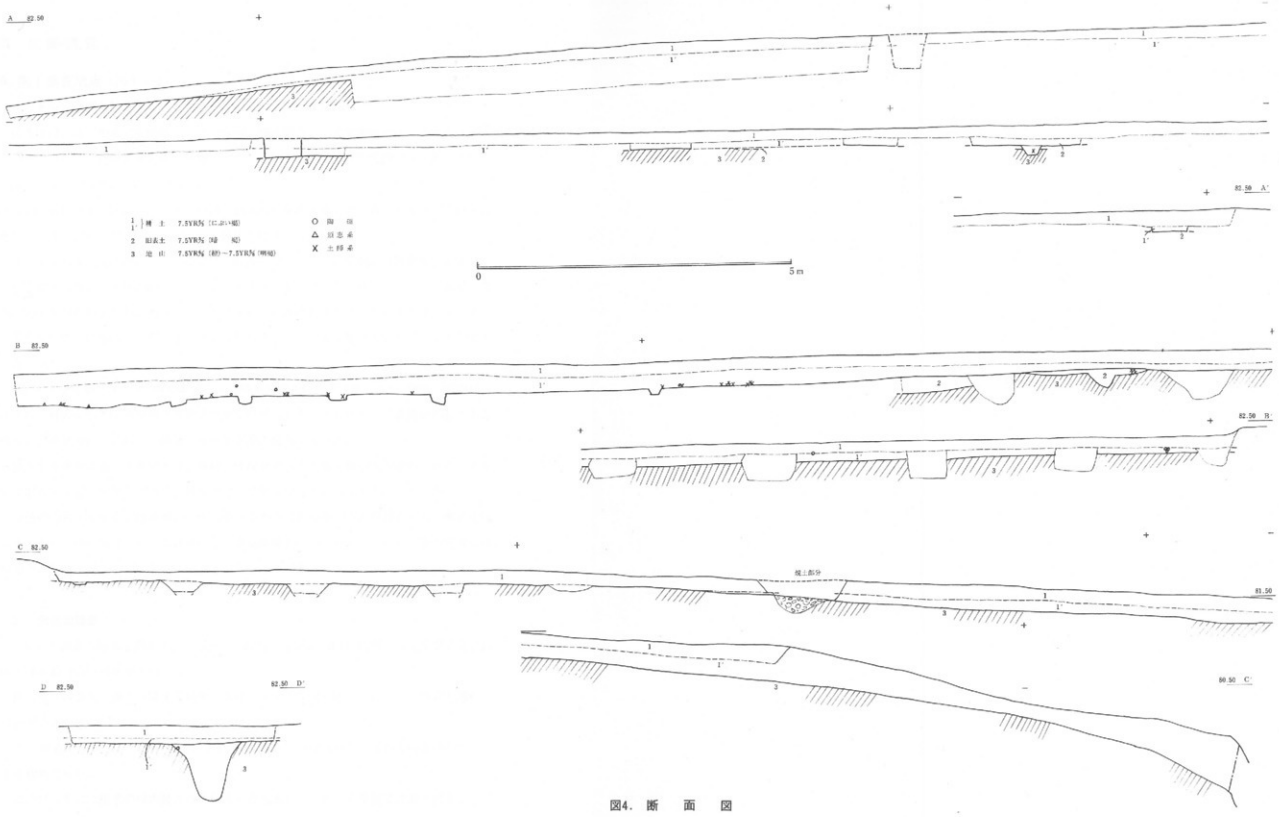

A 82.50
82.50 A'
1 1' 褐 土 7.5YR5/6 (にぶい橙)
2 旧表土 7.5YR5/6 (暗 橙)
3 地 山 7.5YR5/6 (橙)～7.5YR5/6 (明橙)
○ 陶 印
△ 旧志 系
X 土師 系
0
5m
B 82.50
82.50 B'
C 82.50
81.50
80.50 C'
D 82.50
82.50 D'

図4. 断 面 図

Ⅲ　発掘調査

A. 第1調査地点（図2～4）

1.　トレンチ掘り調査

調査地点のほぼ中央部を横断して北から南へ切り割り、三刀屋発電所への道が設けられている。この道の西側部分を主な発掘面とし、トレンチ掘りは耕作作物のない部分について図のように行った。

明褐色重粘質土の地山の上に厚さ約10～15cmの暗褐色粘質土の旧表土があり、その上に褐色粘質土で粗砂の混入した土があり、耕作土化された土層である。

残存する旧表土層は西に下降する緩かな斜面をなしており、原地形は調査地点を中心とする位置が丘端がわずか0.6～0.8m高まる台地状であったことが判った。そして鞍部は西側の宅地との中間あたりに相当し、ここは現状で丘陵のわずかなくびれ部となっている。

また丘頂部分は地山の上面にまで達する耕転のため、旧表土層の失われている部分もあった。

さらに大正年間にはこの丘陵が桑園として整備栽植され、その際に2.5m間隔で幅約80cm深さ70～100cmもの大溝が掘られ桑樹が植え付けられた。これによって遺構検出面である地山に、南北方向に並行して縞状に遺構面が深く滅失していた。

出土する遺物は極く少量であり、微細な破片となった土器・陶器等が認められた。主として旧表土上面に位置しており、耕作に伴って耕土中にも混入するものがあった。

暗色の旧表土を除くと地山面に、主に中～小形の円形の落ち込みが認められ、掘立柱柱穴等であり、中央部分に於いては西に走る溝状遺構も認められた。これらの落ち込みには暗褐色の粘質土が詰まっており、旧表土の落ち込んだものであった。

2.　全発掘調査

トレンチ調査の結果を踏まえて、3 S_1、4 S_1、3 S_2、4 S_2に囲まれる丘頂部分、11m×16m範囲の全面発掘を行った。

地山面は西寄りに漸次下降する地形であり、旧表土を取り除いてはじめて柱穴を認めることができた。

この調査で旧表土と同質の暗褐色土の落ち込みピット約150と、東西方向帯状のものが1本認められた。

このピットには樹木の株の跡とみられるものもあり、これらを発掘又は裁ち割ることによってその底面の様相から種別を弁別した。その結果½の約40が柱穴と判断され、また柱

穴の可能性もあるとみられるものもいくつかあった。

これらの柱穴群はピットの径、断面の形状、ピット底のレベル等によって次のような諸点が指摘される。

ピット径は大まかに30cm前後の小型、50cm前後の中型、70cm以上の大型に区分できる。そしてこれらの掘り込み形状についてみると垂直に近いもの、擂鉢状のもの、さらに一方の側面は垂直であるが他方は斜面となった偏心のものがある。ピット底のレベルも深浅があり、基準面（標高82.50m）からの下りでおよそ60cm、90cm、100cm、110cmに区分できる。特に深いものは偏心した掘り方の大型柱穴であった。

1) ＳＢ－1（図5）

調査区の東寄り最も高い位置にあるかなり大型の掘立建物である。2間×3間（7.0m×10.5m）で、棟方向はＮ9°00′Ｗの南北に長いプランである。この建物プランはトレンチ掘りの過程で予測したもので柱穴1－1、1－2、1－3と1－6、1－7はほぼ整った間隔で並んでいるが、これらの間は桑植溝によって破損しているとみられる。また1－5と1－6の間の推定位置はちょうど溝状遺構部分にあたったため認められなかった。これは柱穴以後において溝状構造が掘られたことを示すものでもある。なお、柱穴の埋土と溝の埋土は全く同色同質であった。

柱穴の心心間隔は1－6・1－7間3.50m、1－5・1－1・1－2・1－3・1－4の各間は3.30m・3.60m・3.40m・3.40mであり、桁行、梁間ともほぼ同じで平均すると3.50m（11.65尺）、柱の太さ約20cmとして柱間距離は3.2mとなる。これは近世日本人の2尋に相当する。

各柱穴についてみると1－3を除く他のものは上端径30～38cmの円形、下端径は25～27cm（推定も含む）の円柱状掘り込みであり、1－3の直径50cmとやや大きい他は同じである。柱穴底面のレベルは基準面から－50～－72cmで1－3は－78cmでやや深い。これらはいずれも最も浅い一群である。

柱穴中に落ち込んでいた埋土は暗褐色で旧表土と全く同じである。土器片の混入等は見られなかった。

2) ＳＸ－1（図5）

この建物の西側1.0mの間隔で並行する柱穴列がある。柱間隔は3.30～3.40m、平均3.3m、柱穴底のレベルも－54～－61cmであり、ピットの形状等も上記ＳＢ－1と同一の様式である。これらからしてＳＢ－1建物に伴う何らかの柱列とみることができるが、どんな建造物であったかは不明である。

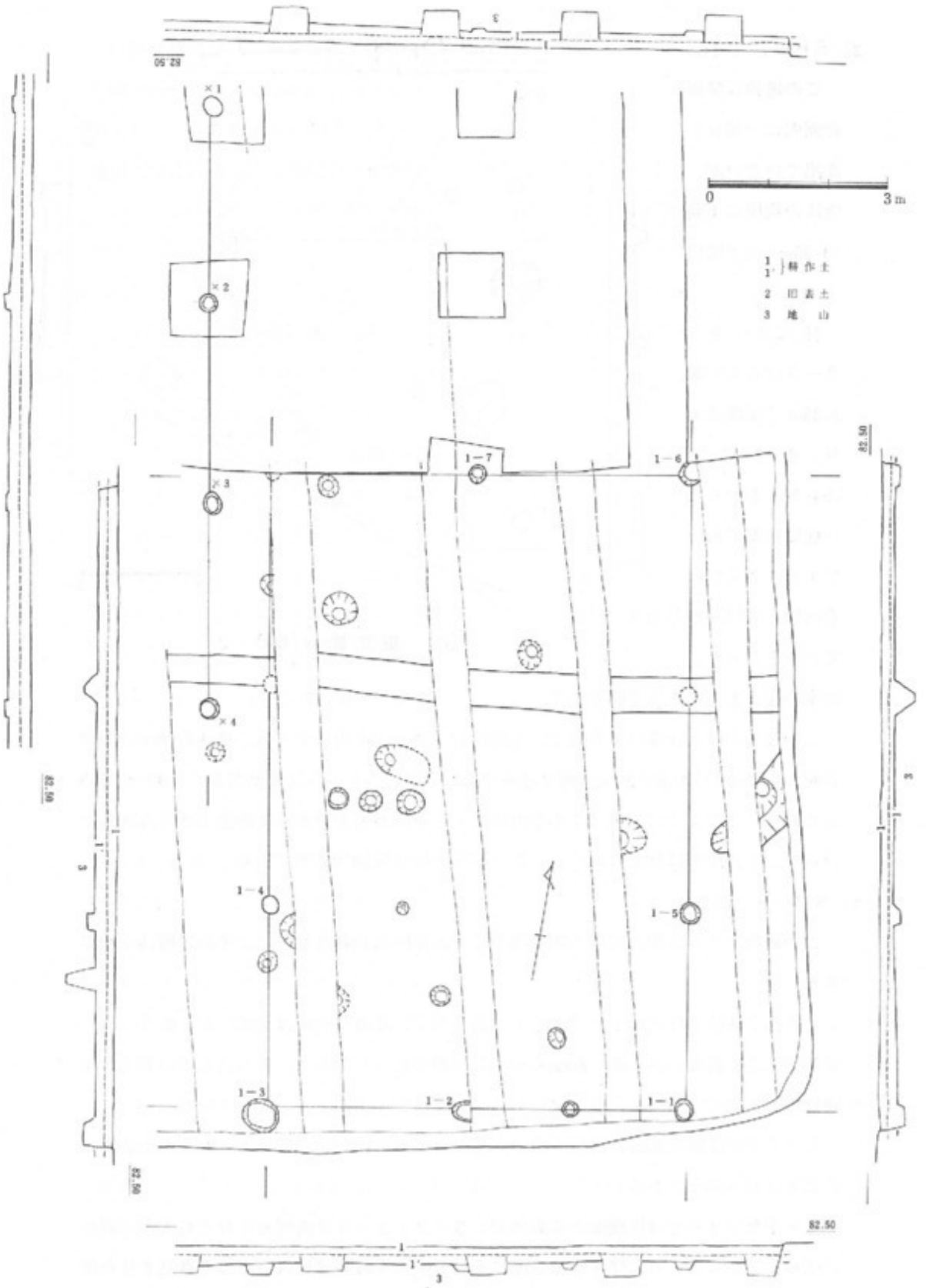


図5. 掘立建物(SB−1)、柱列(SX−1)

2) ＳＢ－２（図６）

この建物は発掘範囲内に一部分しか出ていないが、全体の規模は１間（3.35m）×２間以上である。

柱穴２－２・２－３は心心距離3.35mで梁間であり、2—2・2—1は4.00mを計る広い柱間距離の桁行である。さらに調査区域の外に続いているとみられ、何本の柱があるのかは不明である。

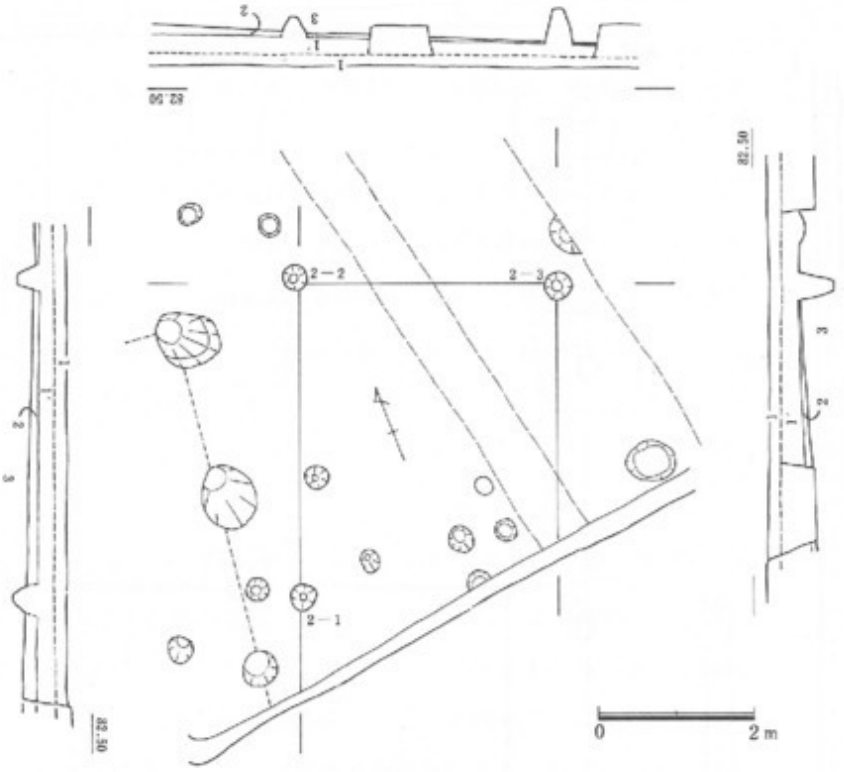


図6. 掘立建物(ＳＢ－２)

この３つの柱穴は深い尖り底で、上端径32～35cmの正円形である。厚さ約20cmの旧地表面からの深さはおよそ30cmの掘り込みであり、穴底のレベルは基準高から－93～－103cmである。このように先尖りで小型の柱穴ピットは旧表土である暗褐色土が落ち込んでいるが、土器片等は認められなかった。桁行方向はＮ20°00′Ｅである。

4) ＳＢ－３（図７）

この建物プランは調査区域の隅角部分に一部が検出されたもので、その規模は不明である。

この掘立建物の柱穴はすべて偏心した掘り方で、北寄り壁面は垂直に近く掘り、南～東側に大きく斜面のある60～80cmのやや長円形のピットである。落ち込んでいる土は暗褐色の旧表土で土器片等の混入は認められなかった。

ピット下端は25～30cmの円形平面で、基準面から－109～－116cmで、旧表土上面からの深さは45～50cmである。

３－１及び３－２は柱根部から東側が、３－３・３－４は南側がそれぞれ大きく斜めに削られている。これは柱を建てる際にその方向から斜めに挿入してのち直立させた作業過程を示すものと理解される。

柱間距離についてみると梁方向では2.00m、桁方向では2.00mと2.4mが認められる。桁方向はN6°00′Eである。検出部分からみて、2間以上×3間以上のしっかりしたやや大型の建物が推察される。

5) SB－4（図8）

この建物も発掘調査区域にはその一部分しか現われていない。

中—大型で偏心した掘り方の柱穴によって構成されるプランで、南東隅の柱穴が大きい。穴下端のレベルは—86～—92cmを測り、旧表土面から25～30cmの深さに掘り込んだもの。土器片等の落ち込みは認められなかった。

柱間距離は梁間4—2・4—3間1.7m、桁行4—1・4—2間2.1mで方位はN3°30′である。

6) 溝状遺構（図5）

調査区の最頂部にあたる部分から西方へほぼ直線に1条の溝遺構があった。発掘面で14mを測る。旧地表から掘られたものとみられ、西端は溝底が地山にまで達しなくなって見失った。旧地表土中の掘り方は埋土との区別がつかず不明である。

溝底は幅10cmの平底で、側壁の傾斜は約45°で断面逆台形である。調査区東端部分では地山面での上端幅67cmを測り、溝底は東端で基準高から—127cmあり、距離14mの西端部では—128cmであった。溝内には旧表土と同じ暗褐色土が落ち込んでおり、雨水等の影響を受けたような痕跡は見当らなかった。

東西両端にほとんど高低差のないこの溝は、形状としては導水を目的としたものとも

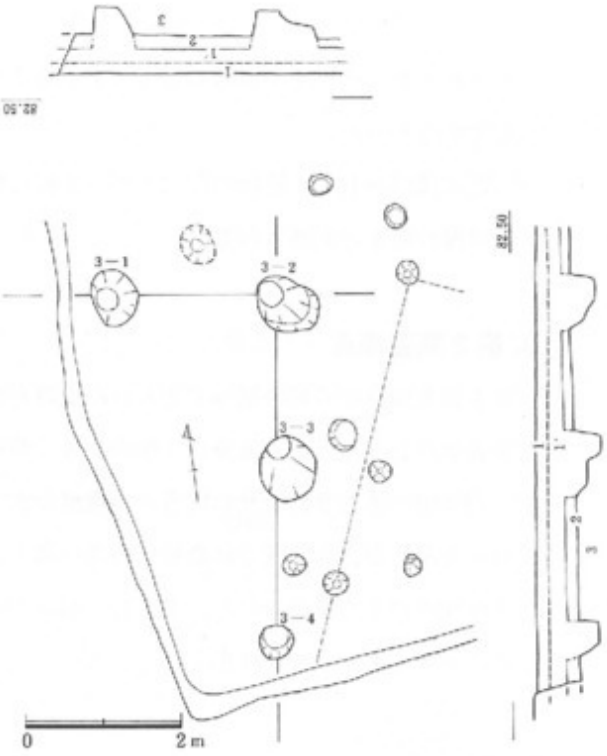


図7. 掘立建物（SB—3）

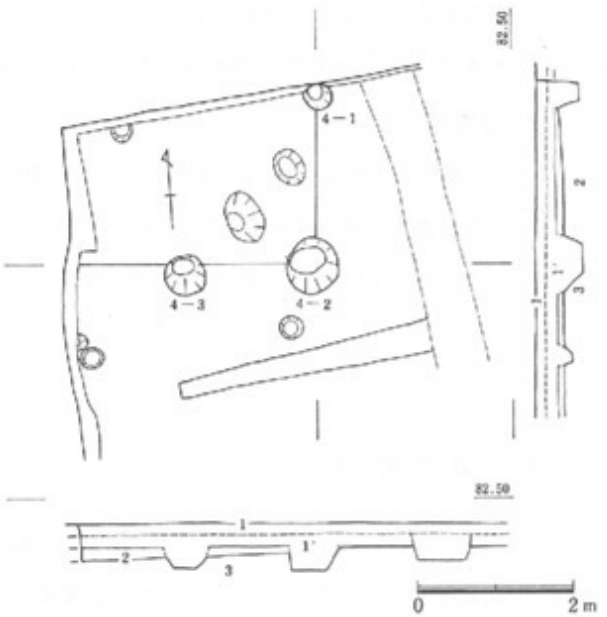


図8. 掘立建物（SB—4）

みられるが、その使用痕跡も見当らず使途は不明である。また、東側の調査区までは達していなかった。

この溝はＳＢ－１建物の柱穴を削って掘られていることから、少なくともＳＢ－１建物以後の所産と判断される。

B. 第２調査地点

第１調査地点から切り割って造られた道路をはさんで東方にとり残された台地部分を第２調査地点とした。この部分には作物が多く栽植されていた。休閑地を選んで、その東端が三刀屋川へ落ちるあたりに何らかの遺構があるのかを検討すべくトレンチを設けた。総長31m をみたが、高位置では桑植付の深い溝が４条認められるほか、最も西寄り高位置に小さな柱穴が１穴認められた。また13～14m の位置には強く焼けた地盤があり、またその近くで大きく深い土壙を検出した。

1）焼土部分

耕作土を除くと粘土質地山面に至る。この地山面に深さ30cm、直径80cmのほぼ円形の凹みを造って強く熱せられていた。このピット内には焼粘土と木炭の細片が混って投入されていた。炭化物の様相からすると近世以降の塵芥焼きの跡ででもあろうか。

2）土壙状ピット

上端径で106cm×80cmの長円形、下端は30cm×23cmでやや凹む底面のピットである。埋土は旧表土と同様の暗褐色土であり、耕土の下面に古伊万里の陶器片が１片が認められたが、ピット内からは何らの遺物も検出できなかった。

Ⅳ　出土遺物

調査区内に配置したトレンチでは、土器・陶器等の細片が合計142片検出し得た。その分布は南西側にやや多いが全域にわたり、集束する部分はなかった。遺物はすべて極く細片であった。

多いものから記すと土師器片～土師質土器片が約半数近い60片、次いで近世～近代の陶器片49片を数えた。その他に須恵器、古式土師器、中世陶磁や鉄滓が少数認められた。このうち土師質のものは極く細片でかつ磨耗が著しく、弥生式土器～中世瓦器の間を区分し難いものが多く、これを一括して土師質片とした。

これらの状況を踏まえて全面発掘を行ったところでは合計110片を検出した。

遺物は元来旧表土上面に散布していたもののようで、耕作土化することによって耕作土層中に混入し、さらに近世～近代の陶磁片もこれに加わったものである。出土量では耕作土内からが最も多く、次いで耕作土の表面で採取したもの、耕作土の下面、暗褐色旧表土層上部の順である。

このように古式土師器や須恵器及び土師質土器は旧表土の上層部分に包含しており、陶磁器の古いものは耕作土下面又は旧表土表面に位置し、耕作土中に混在するものは19～20世紀の磁器が主であった。

	古式土師	須　恵	土師質	中世的陶磁	近世近代陶磁	他	計
表面採取		8	1		27		36
耕土層内	5	2	5	6	55	3	76
耕土下面	4	1	8	10	10		33
旧表土層上部	7	12	60	1	6	3	89
計	16	23	74	17	98	6	234

表1.　出土土器集計表

1.　古式土師器

主に暗褐色表土中に混在して認められる。16片すべてが小さな破片で、著しく磨耗しており、器形・様式等を判断するには至らなかった。胎土には細砂粒を含み、明橙～橙色で焼成はやや良いようだ。内1点だけは外面刷毛目で煤が付着し、内面削り放しの薄手の破片で、概ね甕胴部片とみて大過ないようだ。煤の付着等は磨耗のため不明である。

編年上からも、弥生末期から古墳時代前半期の所産と考えられるが、詳しくは判らない。

2.　須　恵　器

細片のみで23片を採取した。半数が旧表土中にあったものである。全体の器形が判るものは全くないが、蓋坏の蓋の口唇部とみられるものが5点認められる。その他はやや厚手ですべて内面に円形叩き目の明瞭な甕体胴部の破片である。

しかし色調に2種あり、特に白っぽくやや焼成の弱い一群があり、これは時代がやや下るものとみられ、平安時代ごろの白瓷のようである。

3.　土師質土器

破片数74片を数えるが、そのほとんどが指頭に充たない細片であり、また磨耗も著しく、器形の判るものはない。出土層位は主として旧表土上面付近である。すべて胎土は精選さ

れて緻密であり、外面は赤色泥で塗られたものが多く、明橙色で焼成も良い。わずかに残った面からすると壁面調整は丁寧に磨いたもののようで、やや薄手であり、カーブからみて器形は小さいものとみられる。他の事例からして、奈良・平安時代のものかと思われる。

4. 中世的陶磁器（PL11）

出土総数は最も少なく17片であった。陶器、陶磁器、磁器であるが、ほとんどが細片であり、器形不明のものが多い。これらは耕作土の下面位置から採取したものが多く、わずかに耕作土中に混在した。

青磁：碗の破片と思われる1cm弱の細片1片である。内外面ともにわずかに緑がかった色調で器壁は厚く、15世紀以前の中国製青磁碗とみられる。

瀬戸天目：胴部の破片を1片採取した。堅く締まった素地に鉄釉がやや厚く被っており、外面の胴部下半は露胎である。全器形は不明であるが、14～15世紀頃の天目茶碗である。

古伊万里：約1cm余の細片であり、器形は不明である。5～9㎜と厚手であり、細かく貫入が認められる。16世紀末～江戸初期の所産であろう。これに類似するものが数点認められる。

古唐津：細片であり、陶質の素地に淡い灰緑色で細かく貫入が認められる。器壁4.5～5.5㎜、器形不明で、これと同趣のものが他に2点見受けられる。わずかに線状の藍模様が認められる破片もある。

灰釉陶器：素地に多少の相異があるが、淡い緑黄色の灰釉がかかり、貫入が走る。器形は不明である。他の1片は小皿であろうか。いずれも美濃系で16世紀末ごろかとみられる。

5. 近世近代陶磁（PL11）

耕作土中から多く検出したもので、伊万里・唐津系の磁器20片の他に、量として最も多いのは地元の窯である布志名系の陶器40片である。また石見の瓦窯かとみられるものもあった。いずれも農耕に伴って、例えば焼灰等とともに投入されたものと思われる。

6. そ の 他（PL11—37）

鉄滓：2～3cmの小塊8個を検出した。その大部分は鉄錆に土が付着して錆塊状であった。破面は粗鬆で流動性の乏しいものであるが、木炭は混入していない。おそらく小規模な精錬によるものとみられる。この鉄滓も耕作土中に含まれており、発掘区域での産物ではなくあまり遠からぬ場所から搬入したものとみられる。

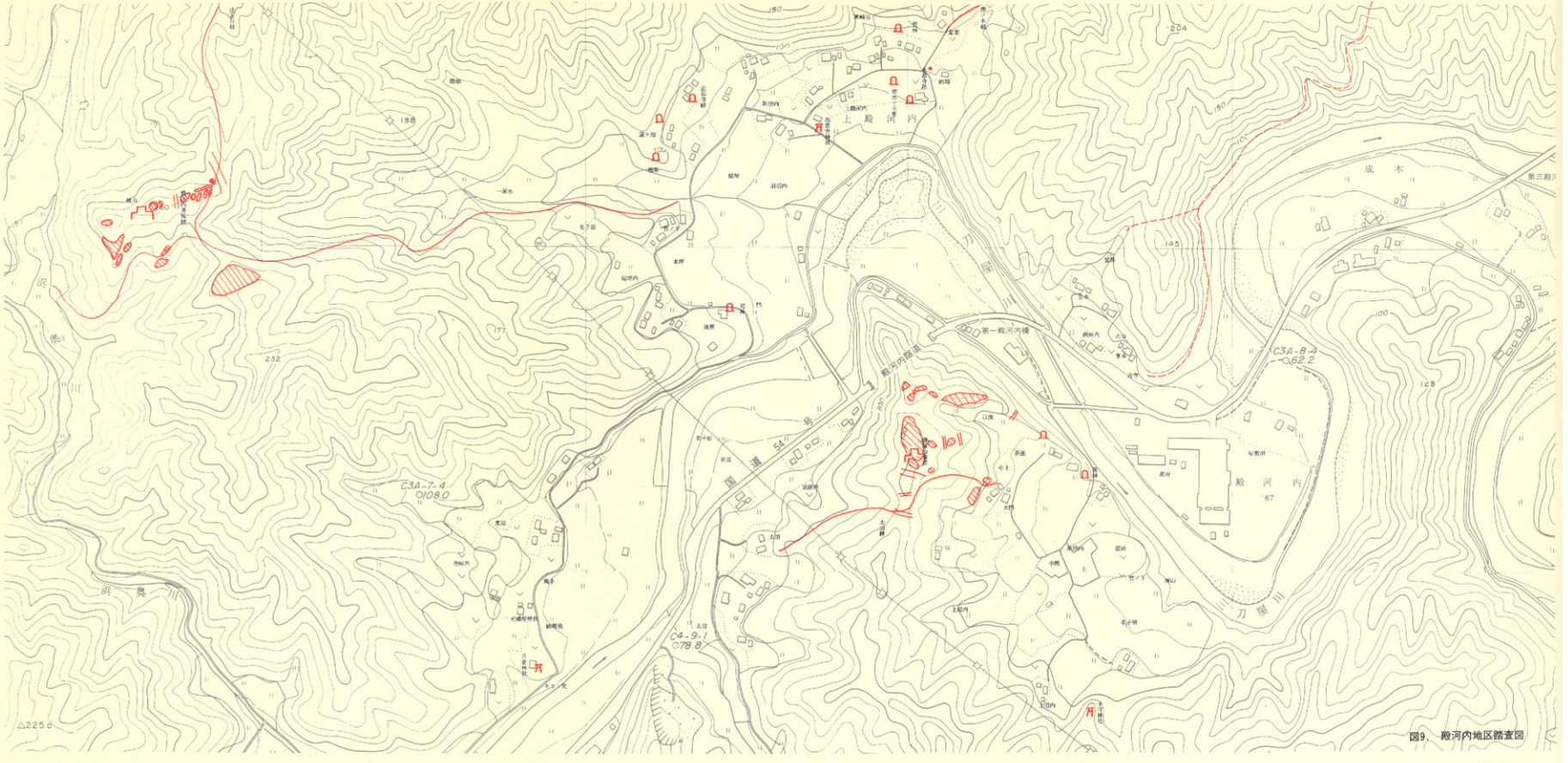


図9、 殿河内地区踏査図

V　周辺部の中世的状況（図9）

「殿河内」は近世の村名で現今は大字名となっている。

この区域は蛇行しながらほぼ中央を流れる三刀屋川によって大きく二分され、北側を俗に本郷と呼び上流から「本郷」「上殿河内」「下津原」と中区分できる。南側は「後山」と呼び、さらに北に向って張り出す丘陵によって二分され、上流部が「太田」であり、下流部が「後山（御城山）」である。この区域分けは近世の〝輪〟でもある。

歴史的にはこの地域が中世三刀屋郷と多称郷の接点にあたり、「殿河内」は三刀屋郷とされているがその境界線は必ずしも明確ではない。後山と太田の境界である丘陵上には城砦があり、既述のように御城山城跡として大正年中に一部整備し、宇佐輔景の故地として顕彰されたところである。

1．後　　山（御城山）

発掘を行った字原崎は通称〝御花畑〟と呼んで、この御城山城跡関連の館跡と口碑伝承されたところであり、後山のほぼ中央に位置する。

発掘地点に隣接して「竹ノ下」「名子田」「城山」の地名があり、特に関東での例のように「竹ノ下」は「館ノ下」の転訛とすると拠点的な館位置とみることができ、「城山（じょうやま）」はこの丘陵突端を切通しで独立させた狭小な物見郭とみることができる。

また発掘地点から西方の丘陵部へ向って「原垣内」「上」「中間」など中世的居宅区域を示すとみられる地名が続いている。

城跡の南麓には「大門」「中上」「茶園」など居宅を示すかのような地名があり、上記の位置からは丘陵の麓部に迂曲して連続している。

そしてこの三刀屋川によって区切られた後山のふところ状の丘麓部には、掘り込まれた古路が通り、それに沿って「大前」「上垣内」「堂ノ前」等や子守神社がある。子守神社には中世の棟札の記録もあり、古くからの集落であったことを示している。

このほか三刀屋川に沿って延びる「以後」の先端近くには、椎ノ木古墓や荒神があり宝篋印塔も祀られている。

2．太　　田

御城山城跡の北側で近世太田輪とされた地区である。目につく地名としては「太田」「須磨田」「角田」「神田」「名子田」「京田」「徳守」などが挙げられる。「須磨田」は寺院名からの転訛であるのか隅角部を指すのか判然としない。同様に「京田」は荘園の名残りであるのか

寺院の免租地としての「経田」であるのかも判然としない。この程度の地名分布は近隣に通常見られるところであり、三刀屋家文書の宇佐輔景関係文書に見られる「三刀屋郷太田荘藤巻村云々」の太田荘であるとするには薄弱であり、従来この地を太田荘とした解釈には疑問をもたざるを得ない。

3. 下津原

この地区は後山の対岸にあたり「政所」「西垣内」「古寺」「堂本」「室屋小路」等の地名がみられる。特に政所は中世の支配を思わせるものであるが付近に関連の名称が見当らぬ点で薄弱であるが、付近にはかつて古墓が集中していたと言われる。近世の「室屋」と呼ぶ主家とその付近にある念持仏堂の所在は明瞭である。

三刀屋の町並から現在の国道トンネル部の小峠を越して、古い山路がこの地へ認められる。おそらく近世以前からの通い路であったのであろう。

4. 本郷及び上殿河内

御城山城跡の北側対岸に位置する中心的集落である。本郷と上殿河内の区分は必ずしも明確ではない。

三刀屋郷尾崎村から「樫ノ木越」の峠を字殿河内に下ったところに永昌寺跡があり、その前庭ともいえる小字清水には十王堂があったと伝えられ、龕に納めた中世宝篋印塔や地蔵尊があり、付近には古塚がある。この十王堂はかつて古刹禅定寺の東門のあったところとも伝えられている。また字清水の山麓部には荒神が集中して祀られているところがあり、近年多種の祭祀遺物が出土した。この部分については試掘を含む詳細分布調査を行ったので別項に記述する。

この本郷区域のほぼ中央あたりに「上殿河内」の地名があり、ここに産土神である出雲井神社がある。この神社の社伝には不明確な点が多いが、縁起は古代にまでは遡らないもので、おそらく中世末～近世初頭と思われる勧請由来が口碑として伝えられている。

出雲井神社の近隣には「新垣内」「前垣内」等居宅を示す地名があり、現在も宅地となっている。

さらにこの上方の山麓部には寺跡があり、「正福寺」の地名で民家の宅地となっている。この庭にある花崗岩製の宝篋印塔は雲南地方に類例をみない優品で、室町初期の作とみられるものである。

正福寺の裏山は張り出す丘陵の突端にあたり、「蓮ヶ畑」「極楽」の地名で中世以降今日に至るまとまった墓地群である。一帯に半分土に埋れた宝篋印塔や五輪塔の断片が散乱して

いる。

これと谷を挟んで対崎する位置の丘陵突端部近くには「竹ノ下」があり「館ノ下」の転訛とみられることから館が想定され、近くには「矢垣内」の地名もある。これらの前下方の水田地帯には「門（かど）」「本坪」「名子田」等があり、居宅の区域であったと考えられる。そしてさらに上手の「後原」にはかつて惣荒神が祀られていたが、先年道路開削に際しそこから大形の五輪塔の残欠が出土し、併せて祭祀遺物も出土したとのことである。

「竹ノ下」と「極楽」との間の谷は大きく直線的に深い。谷の最も奥まったところに「城山（じゃやま）」があり、その少し手前右寄りに「殿畑」と呼ばれているところがある。

城山は旧宮内村との境界である浜奥の谷間へ突出して見下ろす独立した丘陵となっており、郭群が構成されて砦址であった。

位置からして以後これを「殿河内奥城跡」と仮称することとする。

この城域の旧往還路は樫ノ木越しで殿河内地内に入って山麓部を通り、この谷（字一遍水）を城山の切通し部へと登り「引越し」を下って奥の谷間に下りる。そしてここで分岐して禅定寺方向、根波方向、宮内方向へとそれぞれ連らなる。

一方、三刀屋氏の拠点とした字古城の「じゃ山（石丸城）」の直下から法正谷を登りつめ、そして尾根伝いにわずかな道のりでこの殿河内奥城跡と連絡している。

なお浜奥に近い付近の山地には「勝負廻」が地名として注目される。

5. 日倉神社について（ＰＬ９、図10）

日倉神社は調査の対象とした大字殿河内に隣接する大字乙加宮・宮内に所在し、かつて多祢郷（懸合郷）を中心とする旧14ヶ村（現三刀屋町、掛合町、吉田村にわたる区域）の産土神である。古く出雲国風土記記載の日倉社であり、中世石清水八幡宮の別宮の一つ自蔵別宮が合祀されたと伝えられ、元宮は掛合町日倉山にあったとも言われている（掛合町誌）。しかしこの遷移については異論もあり、定説はない。

この神社の所在地の旧邑名を宮内と呼ぶのは日倉神社に由来するものとみられ、多祢郷の最北端にあたる。

同社の保存する棟札は戦国時代以降のものであるが、社宝の神像等には室町時代とみられるものもある。社伝によると古記録等は天文年間の火災で失われたとある。

殿河内遺跡調査の中途で宮司日野　正氏の厚意によってこれらを拝観する機会を得た。以下同行した県立博物館学芸員的野克之氏の同館報記事の原稿によりこれらの概要を抜粋する。なお棟札については別項で記載する。

○獅子頭１頭（室町ごろ）長50.6cm、幅37.7cm、高25.6cm、表面に傷みあるも細部にと

らわれず大まかで迫力ある表現である。

○木造僧形坐像1躯（室町ごろ）高41.5cm、一木造、彫眼、本来彩色だがほとんど剥落、松江市成相寺蔵のものに近似する。

○木造女神坐像2躯（室町ごろ）高53.4cmと53.1cm、ともに拱手した通例の女神像。構造、作風は僧形坐像にほぼ同じ。

○銅造千手観音坐像懸仏1面（室町ごろ）径18.3cm、像境一体で像を打ち出し、細部は線刻、手表現はのびのびと細部表現もうまい。

他に江戸時代の作とみられる仏像、神像、仮面等もある。

特に前記のような注目すべきものがあることから、今後さらに精査が必要であろう。

以上のような所見からして、室町期以降にはかなりの勢力をもつ社であったことが窺われる。

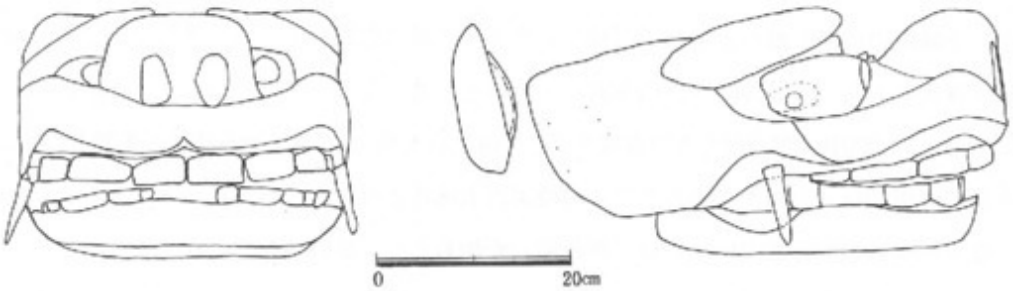


図10.　日倉神社獅子頭

Ⅵ　城跡と荒神塚

周辺部の主な遺跡として二つの城跡と字清水の荒神塚について調査した。また併せて塚や古墓に散在する石塔についても測図を行ったのでこれらについて記述する。

特に荒神塚にみられるような中世の祭祀については調査報告例が少なく、比較検討はさらに今後にまつことになろう。

A. 御城山城跡（図11）

大字粟谷との境界である山塊から、迂曲して流れる三刀屋川へ向って北に張り出す支丘

図11. 御城山城跡実測図

陵の突端部に位置する。御城山（後山）集落の水田面から約50mの比高で、標高154.7mが最頂部である。

この城跡の直下を国道54号線が通っており、城跡の端部を殿河内トンネルで貫通している。

城郭の構成は、南側尾根続きを太田峠の道と大切通しで二重に切断して、南北約200m、東西約100mの範囲である。

最頂の主郭が最も大きく、40×12mで南北に長く、その南端を高く削り残して物見郭としている。西側山腹は急斜面で、下方が太田地区である。なお登頂路は大堀切りから西山腹へ回って郭へと続く。東と東南の方向には一段下ってから低く短い支尾根があり、やや平坦なその稜線上には小さな切り割りを設けて、東麓から山腹を迂回して登ってくる道への備えとしている。この二つの支尾根の基部には縦に削りを行って、やや畝状とした阻塞構造がみられる。谷間には石積みの井枠とみられる凹地があり、かつての井戸かと思われる。なお谷間を下ると現に水を湛えている小さい池があり、付近の人々はこれを古井戸と呼び、居宅地を思わせる。さらに谷間を下り丘陵の突端部へ出ると「茶園」「大門」「中上」などの居宅区域に至る。

主郭から北へは痩尾根が続き、北と東へ分岐して延びるのを大堀切りで切断して独立させ、その先は支尾根の分岐するあたりに大きな郭を2段設けている。北は狭い尾根筋となって三刀屋川に臨み、対岸に殿河内の郷を見下ろす東へ延びる支丘陵は大きな谷を抱き、谷向きの面には「字以後」の宅地が造られている。背面は急落して三刀屋川に至る。丘陵先端は「椎ノ木」の地名で古墓があり宝篋印塔もある。

この城郭の大手は「大門」からS字形の虎口を抜け、山腹を南に向って登るかつての往還がそれであり、その中途から堀切り部へと登るものであろう。

また古井戸のある谷には、わずかにつづら折りの路跡が主郭部下へと認められる。これが搦手であろうか。

以上のようにこの郭群構成は、太田側又は北の対岸に対する防備の体勢に整備されており、御城山（後山）地区を懐としたものである。

これらの構成要素からして主となる砦ではなく、いずれかに属する番城的なものとみられ、南西山続きの栗谷城との関連についても調査が必要と思われた。大きく戦国期の所産とみて大過ないだろう。

B. 殿河内奥城山（図12）

殿河内から宮内の浜奥へ越す路筋に所在し、谷奥行き詰った峠の部位から浜奥の谷へ突

出する独立した尾根上に構成されている。標高約230m、浜奥の谷間からの比高は約80mである。

ほぼ東西方向の狭くて長さ約200mの尾根上に、突端である西寄りから二つの頂部それぞれに簡易で狭い単郭があり、物見郭又は烽火用かと思われる。これらの郭はその縁辺部が明瞭でない。なお西端の郭には、その端部に投石用かと思われる礫石の堆積が認められた。

物見郭から急落して堀切り部を設け、一段低くなった東寄り尾根部は削平段が5段連らなる郭群となっている。その第1郭が特に大きく7×20mの削平面で、東へ第2、第3…郭と階段状に狭い郭を連ね、北側は第5郭位置まで土塁状の犬走りを削り出して造っている。この犬走り先端と第5郭西端は崖で急落し、北東尾根との間を掘り割って大切通しとなっている。郭群への上り口はこの切通し部からである。

この切通し底は通路となっており、近くには「刀磨ぎ池」と呼ぶ小凹地もある。ここから北方へ尾根伝いの路は大字古城法正谷へと連らなり、「オオナリ（大平）」を経て東方山腹の路を下ると殿河内の集落に至る。

また南西谷間へ下ると宮内の浜奥へ下り、さらに禅定寺へと続く。この南西へ下る路に対して張り出す部分には帯状の郭があり、常に通行を監視する体勢にある。

概観してこの郭配置は簡素なもので、先端部の物見様の郭などからして枝城的性格で、西方に対して構えたものと判断される。

位置等も考慮すると、この砦は字古城を拠点として配備された枝城又は番城的なものと

図12.　殿河内奥城山略測図

みるのが妥当であろう。そして大まかに戦国期のものと考えて大過ないだろう。

C. 清水の荒神塚（図13・14）

字清水地内、妹尾氏宅（家号前新屋）のすぐ裏手にあり、急峻な山麓に立地する。この裾部はかつての往還であったと思われ、その脇に位置することになる。

10数年以前この一隅で幅約２ｍの崩土があり、ここから和鏡とともに坏状の土師質土器が10数枚上向きに重ねた状態で、地権者の妹尾氏が発見した。重ねた状態の石もあったように思うとのことであった。

さらにその後、約４ｍ離れた地点に柿樹を植えるため掘り返したところ、鉄鍋と刀の残欠３本が土師質土器と共に出土した。

これらの出土品はまとめてその上方に再埋納して祀ったとのことであった。

同氏によるとその付近には点々と〝荒神さん〟が在り、指標として南天・茶樹が植えられた所や、かつて「しい」「たぶ」の大木があったところで川礫を含む集石部を伴う所があるとのことであった。そしてこのあたりを「荒神ぶろ」と呼んでいたのである。

調査は崩壊してしまった和鏡出土地点を除き、鍋等を出土した掘り返し部分を再び排土して埋納壙を確認することと、出土遺物の実測を行うこととした。

畑地から約3.5m上った40°近い斜面であり、排土してみると表土面から山手側で深さ約１ｍ、前側では深さ約50cm、直径約60cmの穴であり、山手側は崩土防止のためと思われる３段の扁平石積みが上方にあった。底面にも投入したような状態で角礫が１個認められた。

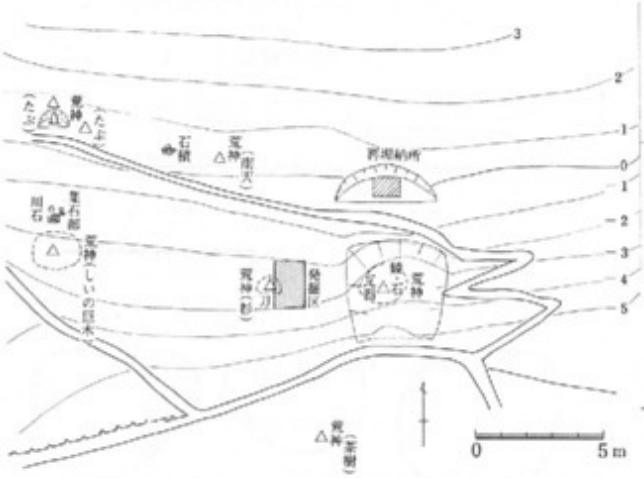


図13.　清水荒神塚見取図

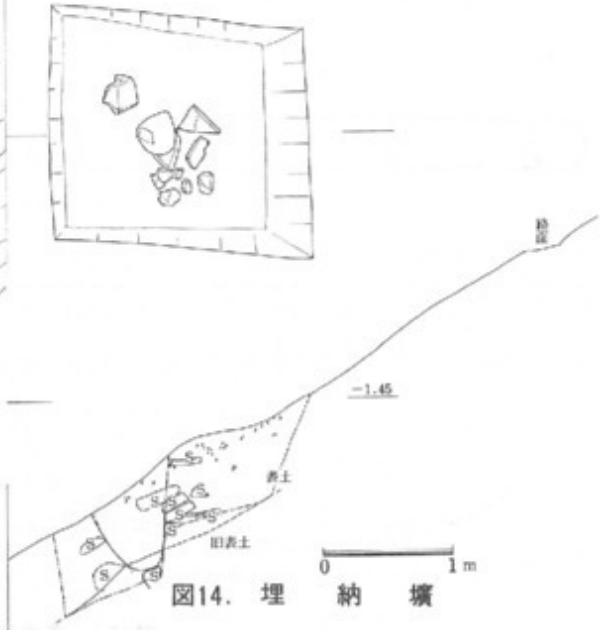


図14.　埋　納　壙

ピットは地山面には達していなかった。このピットが埋納壙と思われる。現在ではさらにその上面に茅株が繁茂しており、その株間に土師質土器の細片が多数混在していた。

この埋納壙からは鍋と刀片の出土は確かであるが、土師質土器はどの個体があったのかは弁別できなかった。しかし時期的な差異はほとんどないものと考えられるので、出土遺物は2か所のものを一括してみることにする。

1. **鉄　鍋**（図15）

厚さ4～5㎜と薄手の鋳鉄製で、中心部鋳注口付近を欠く約半分ほどの破片である。突起状共鋳の足がある。おそらく3本であるとみられる。直径28cm、深さ13cmと小型の品である。

2. **刀**（図15）

3本あり、内2本は残欠で前半部を欠く。

完形品についてみると全長47.8cm、刃渡り36.3cm、茎長11.5cm、栗尻造りで反りは約4㎜と少ない。刃幅2.8cm、棟幅6㎜の平造りの脇差しである。

残欠2本のうち1本は栗尻りで、他の1本もおそらく同様であったのだろう。腐蝕が著しいがやや幅の狭い細身の平造りとみられる。長さも短く反りの少ない脇差しでほぼ上記完形品に近いものと思われる。

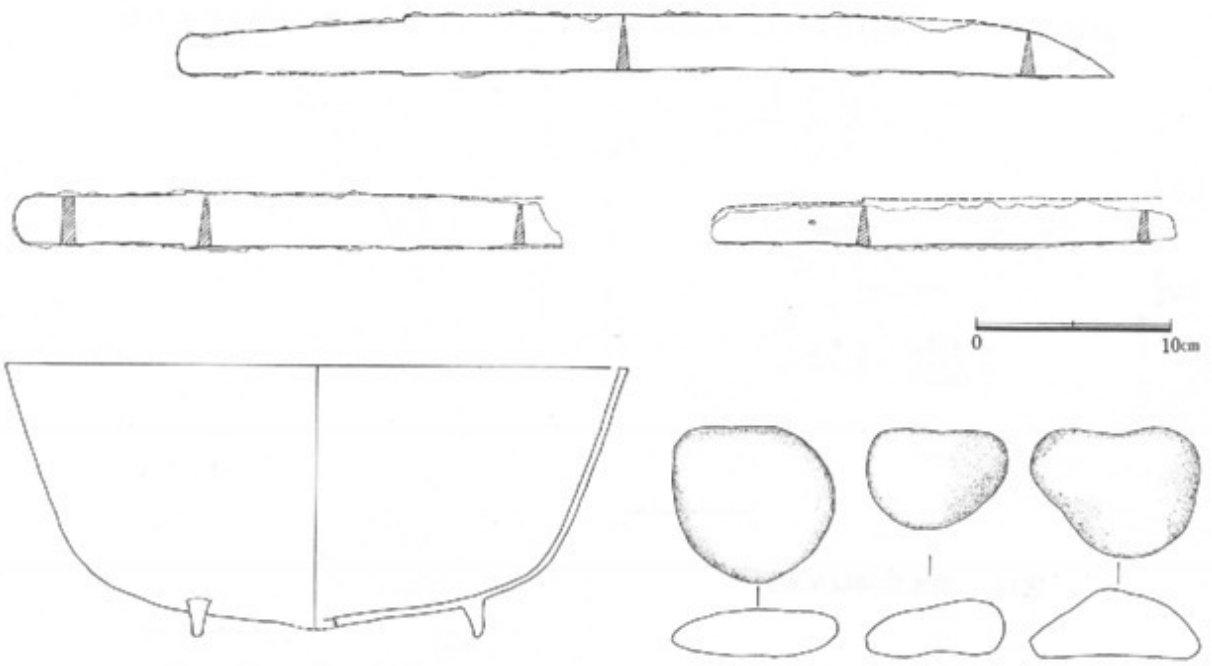


図15.　清水荒神塚出土品（1）

3. 円　　礫（図15）

崩壊した部分から重ねた状態で出土した3個の円礫である。

平らな餅を思わせる直径6～9cmの扁平な花崗岩の川原石で、厚さは2.5～3.5cm程度である。出土状況の説明から祝餅を重ねた様子が連想される。

4. 和　　鏡（洲浜松花枝双雀鏡）（図16）

崩壊部から採取されたもので、埋納の詳細は不明であるが、伴うものに土師質土器や円礫がある。

図16.　清水荒神塚出土品（2）

和鏡は直径10.2cmの円鏡で、外縁は直角式中縁である。鏡背文様は特殊中線二重圏によって囲まれる。この圏の外圏は中線を9か所で刻目状とし、内圏は円周上6か所で内へ突出するへの字圏とし、地は放射状刷毛目としている。菊亀鈕で頭を上にしている。図柄は洲浜、松、橋、花枝、垣、双鳥である。花は梅に似ているが5弁と6弁が混在し、枝は直線の條枝であり特定し難い。鳥は尾をやや長くした雀と思われる。

やや鋳潰れもあるが、高彫り気味で胎質は良い。地方での作であろうか、無銘である。

この鏡に見られる特殊二重圏は室町鏡の多くに通例のものであり、作風からしても製作時代は室町時代としてよかろう。

5. 土師質土器（図17）

崩壊部と植穴部から出土した土師質土器はまとめて保存されており22点を数える。これらの個々がいずれの位置から出土したかは弁別し難い。

これらの土師質土器は、A～Cの3つに区分し得る。

A類は17－1～8の8点で、直径11.5～13.0cm、深さ2cm前後、底部径は約4.5cmである。ろくろ造りではあるが、歪んだものが多くラフな製作である。器の内底は裏から押圧して盛り上り、内壁面とその盛り上った底面との境は明瞭な凹線で区画がある。器壁は5mm程度の厚さで口唇はつまんで尖り気味又はわずかに外反し、内外底の全面を指でなで仕上げとしている。胎土は緻密で焼成良く鈍い橙色を呈している。

B類は17－9～19の10点で、糸切り底のものである。口径は上記よりわずかに小さく約11.5cm程度（－15はやや小さい）、深さ約2.3cm、平底の面には回転糸切り痕が明瞭である。器壁はやや薄く4～5mm程度で、腹面にはロクロ整形の際のアクセントが明瞭なものが多

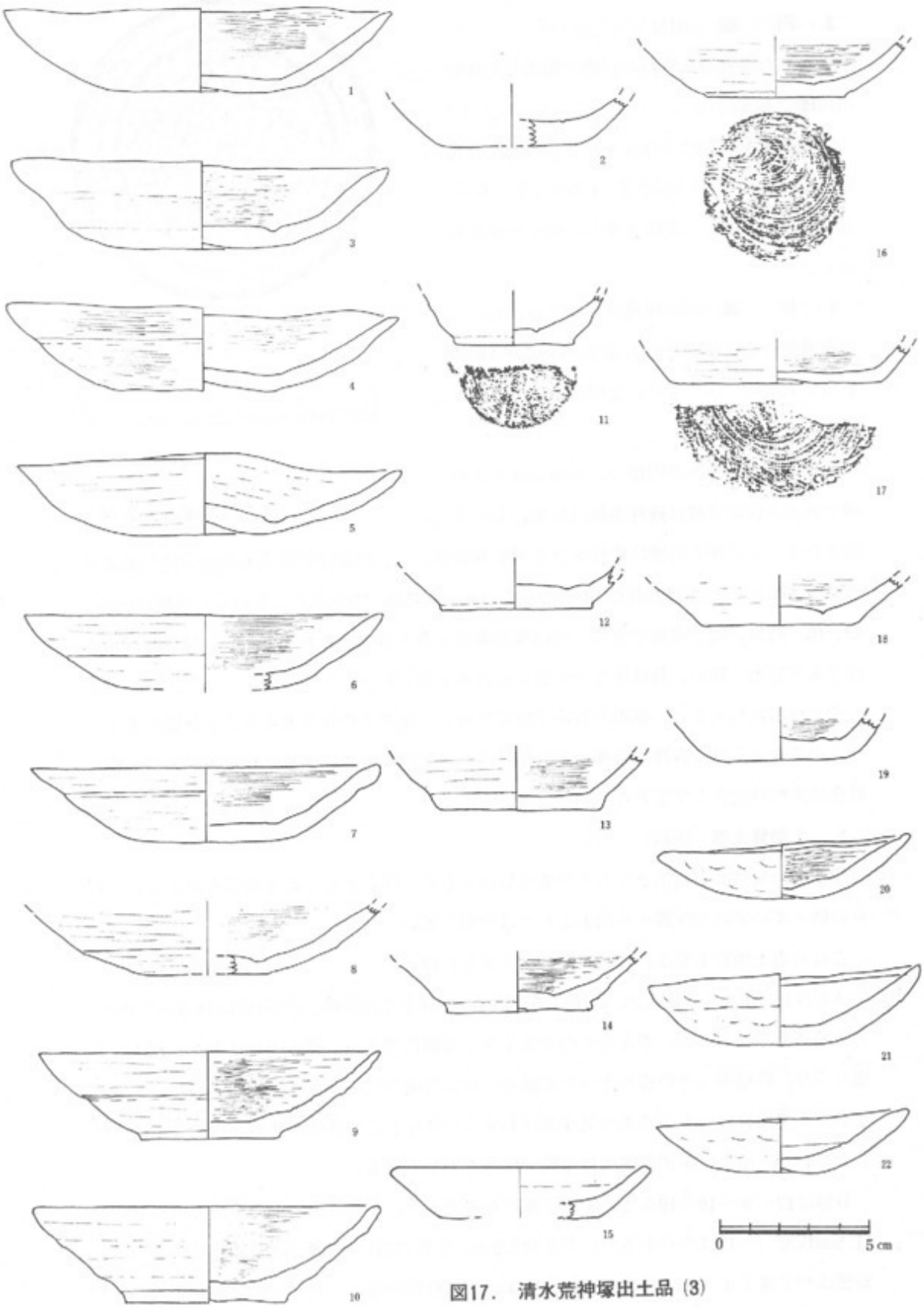


図17. 清水荒神塚出土品 (3)

くなで仕上げ、内面は底面との境の明瞭でないもの（－9、－13、－16、－17）とアクセントのあるものとがあり、いずれもなで仕上げである。平底の直径は4.5～6.7cmまで区区である。胎土焼成ともにA類と同様緻密で良好である。

C類は　手捏ね様の小型品で、－20～22の3点である。口径8～9cmと小さく、深さも約1.5cmと浅い。底面は直径2.0～2.6cmと小さく丸底又はわずかに凹む。内面底部は丸く造る。器壁は6～8mmと厚く不揃いで、口縁内側に1段のアクセントをもってやや尖り気味である。腹部外面は指頭で強く削った痕が明瞭であと軽くなで仕上げとし、内面は回転なでである。胎土、色調、焼成はA、Bと同様である。

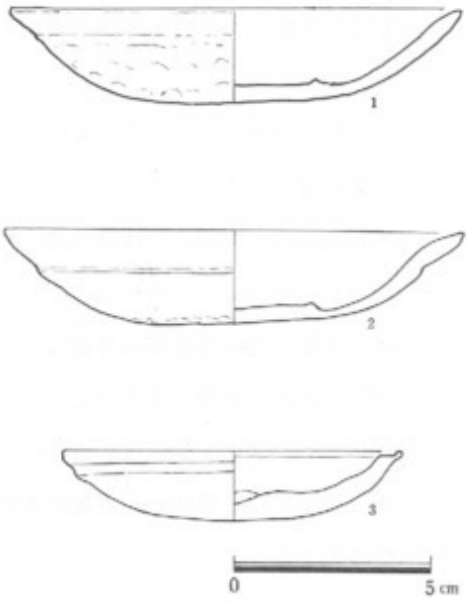


図18.　（参考）岡田山古墳裾出土
（三宅博士原図）

これらの土師質土器は松江・桧山古墓群出土のものなど、若干の報告例がある。ここに比較参考として示したものは松江・岡田山古墳墳裾から出土し、磁器（舶載品か？）を伴っていたものである。時期はこの磁器からしておよそ16世紀とみなされている。図18－1～3は本例のA、B、C類にそれぞれ対応し、ほとんど同趣とみられるものである。

D. 石　　塔

1.　御城山の椎ノ木上宝篋印塔（図19）

御城山城跡の物見郭から東へ御城山の集落へ延びる細長い支丘陵の先端部に椎ノ木を神木とする荒神が祀られており、付近には川石を集石した古塚が散在する。この尾根端から約80mの小池宗敏氏宅（家号上椎ノ木）の上手にこの宝篋印塔があり、地元では〝侍墓〟とも呼んでいる。

墓域には石で囲った長方形の土壇に2基の宝篋印塔が並べて建てられている。右塔は破損が著しく左塔は完形であった。

左塔についてみると、凝灰岩質の材で当地産の来待石である。それぞれ修法納経のためであろうか刳り抜きした基壇があり、全高119.5cmの簡略された全階式の造りである。

基壇は57cm角で高さ17cm、内側を44cm角形に刳り抜きしてある。肩部は削りで反花等は認められない。

基台部は22cm角、高さ23.5cmやや上すぼみとし、2段の階を有し階高約3cmである。下

方に、下幅22cm、高さ8cmの台形の刻り込みがある。

塔身は18cmの立方体で、4面に梵字を月輪に薬研掘りしている。

笠は隅飾り突起と一体造りで、笠部軒の界線がなく簡略化された様式のもので、高さ26cm、隅飾り突起部幅36cmを測る。下端は2段の階、露台も2段の階をなし、その上面に直径約10cm、深さ3.5cmの枘穴を穿っている。なお、隅飾突起と笠体との界線は省略され、笠厚は大である。

相輪は高さ35cm、直径12～15cmで、伏輪はなく、九輪の上にやや大きい輪を置いて請花とし、宝珠も省略便化されて、わずかに小突起状にしている。全体として相輪が太い感じの姿である。基部の枘は直径8cm、長さ3cmで下端は未調整である。

全体としてみると、隅飾り突起はわずかに外反しながら立ち上り、相輪は太目で省略された手法となっていて、全階式を踏襲している。なお梵字は金剛界四仏を配置している。

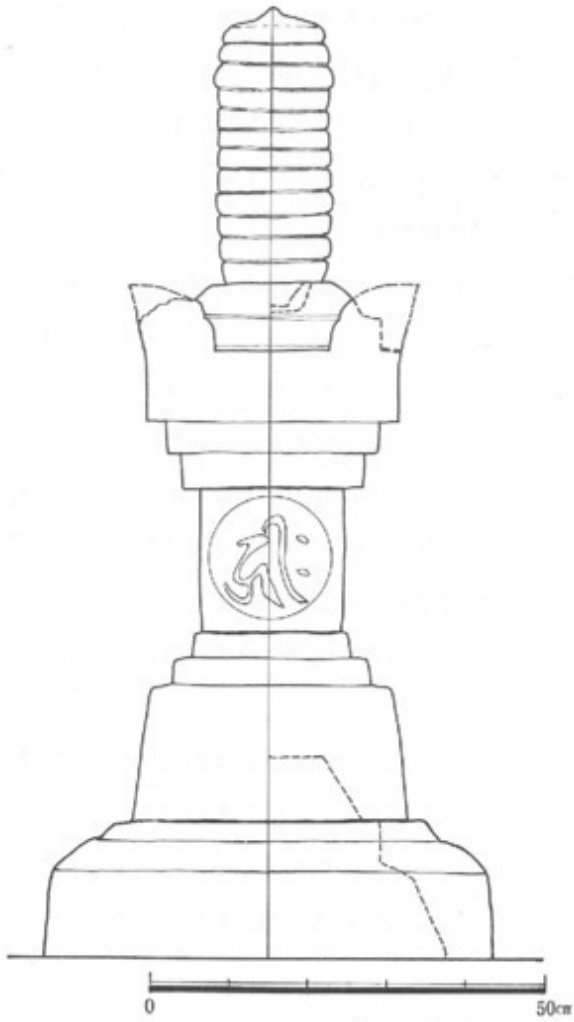


図19. 椎ノ木上宝篋印塔

これらから正福寺庭の宝篋印塔より後出するが、未だ省階式にまでは至らず、相輪の様相は中世末頃の当地方に散見される様式に近似し、中世末～近世初頭の当地方の省階式に先だって見られる中間過程的なものと考えられる。

この塔は位置からして御城山城跡に関連する遺構の一つとみてよかろう。

2. 正福寺とその付近の石塔（図20）

正福寺の跡は現在富田一雄氏の宅地となっている。この前庭の一隅に宝篋印塔や五輪塔が遺存している。

口碑によると、正福寺は禅定寺の末にして庵寺であり、本尊は禅定寺に納めてあるとのことであった。寺伝等について何らの文献もないが、近世文書には「観音堂正福寺」「堂壱間半ニ弐間茅葺石居、禅定寺抱」と記録されているのみである。

しかし、かつてはかなりの規模の寺院であったと思われ、裏山には蓮ゲ畑、極楽の地名が示すように広い墓地群がある。そしてこの中にも五輪塔や宝篋印塔の残欠が半ば埋没して散布している。

1) 正福寺宝篋印塔 (1)

花崗岩製で極く丁寧な造りである。相輪頂部の宝珠部が欠けているが、現存高105cm (推定全高約120cm)、基台部幅55cm、全階式の整形優品である。

基壇は55cm角で高さ19cm、上半分は複弁の蓮弁を刻んだ反花座としている。基台部は32.5cm角、高さ43cm上端は2段の階をなす。

塔身は19cm角、高さ18cm、月輪に金剛界四仏の梵字を薬研掘りで示している。笠は31cm角、高さ23.5cm、笠下2段の階、露台は6段の全階式である。隅飾突起はほとんど直立し、これに格挟間状の彫り込みが施こされている。

相輪は高さ21cmで折損しており、伏鉢、請花はいずれも厚さ3cm、直径10.5cmで、請花は模式化した16弁が刻まれている。九輪はその厚さが下方からわずかに細まりながら、

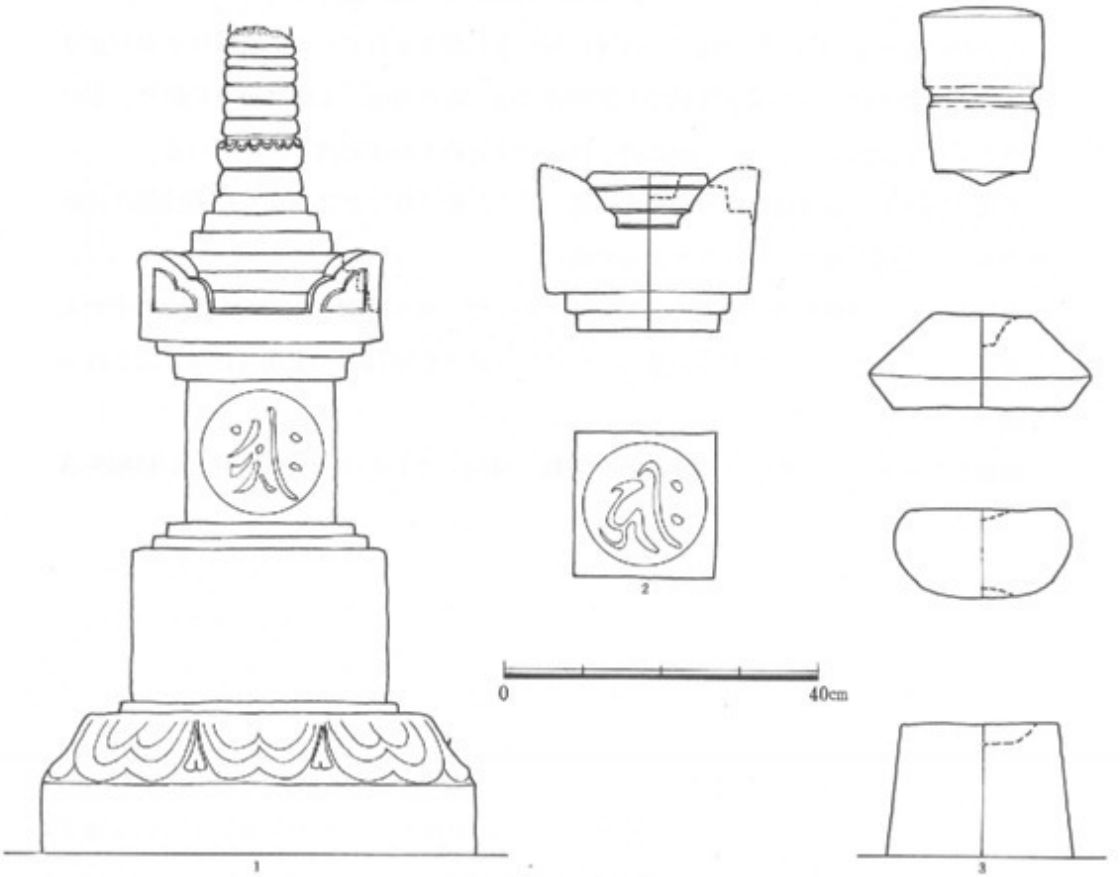


図20. 正福寺石塔

漸次薄くなっている。宝珠部は欠失して不明。

近郷においてこのような全階式の塔は類例がなく、そのうえ花崗岩製は皆無であり、反花座や請花の整ったものも古い様式のものでは類例がない。強いて類似品を挙げると、簸川郡佐田町・旭の宝篋印塔がある。これは未だ実測されていないので計測的比較はできないが、〝伊秩城一族のものと推定〟〝鎌倉末～室町初期〟とみられているものである。

2) 正福寺宝篋印塔 (2)

完形ではなく、塔身と笠部が残存している。凝灰岩製で塔身幅18cm、4面の月輪に梵字を刻む。笠部の幅は隅飾突起部で28cm、高さ20cm、露台は3段階の省階式である。笠部と隅飾部との間に界線が明瞭に刻まれ軒は厚い。隅飾突起はわずかに外傾するが、直線的な立ち上りを示す、格挟間様の彫り込み等はない。時期は上記より下ると考えられる。

3) 正福寺五輪塔

同様に正福寺庭に1基分以上が崩れて散在した。凝灰岩製である。

地輪はわずかに台形をなし、下幅23.5cm、上幅20cm、高さ22cmを測る。

上面の水輪の当り部分は深さ2.5cmの浅い刳り込みがなされている。水輪は下から3分の2位置を最大径とした扁平球状で、直径22.5cm、高さ11cm、上面は平らに削り、その中央をわずかに凹めている。下面は直径10cmで深さ約1cmほど浅く凹めている。

火輪は28cm角、高さ12cmでやや平たい感じであるが、軒反りは少なく、四棟線は直線的である。上面の刳り込みは深さ4cmで深い。

空輪は完全な円筒形で、中間に刻みを周らせて空・風を区画し、頂部を極くわずか尖らせている。枘もわずかな突出に造っている。下端の直径12cm、上端径15cm、高さ21cmを測る。

概観して水輪がつぶれ、火輪が薄く、空輪が筒状となるもので、最も新しい様相を示している。

Ⅶ　文献等にみる「殿河内」

1.　地名の変遷

今日、この地域は「殿河内」と書き「とのごうち」と訓んでいるが、この地名は時代によってどのような変遷をたどってきたのであろうか。主な史料によってまとめたのが次の表である。

地　名	年　　号	出　　典	備　　考
戸野賀内	明徳３年(1392)	佐方文書(京極高詮安堵状)	熊本県立図書館蔵
殿垣内	応永17年(1410)	〃　(京極高光安堵状)	〃
〃	文明９年(1477)	〃　(佐方綱氏置文)	〃
殿河内	永禄６年(1563)	岸文書(多賀(山)通定宛行状)	
〃	天正８年(1573)	福円原八幡宮文書(　〃　)	
〃	明暦２年(1656)	殿河内村御検地帳	広島大学図書館蔵
〃	寛文５年(1665)	子守神社棟札	
〃	延宝４年(1676)	殿河内村地平内検地帳	広島大学図書館蔵
〃	貞享２年(1685)	出雲井神社棟札	
殿川内	享保２年(1717)	雲陽誌	
〃	安永２年(1773)	原文書(飯石郡中独案内蝶(帳))	島根県立図書館蔵
〃	寛政４年(1792)	飯石郡中萬差出帳	〃
〃	嘉永４年(1851)	殿川内村本田・新田・屋鋪坪名寄	三刀屋町役場蔵
殿河内	明治５年(1872)	殿河内村となる	
〃	明治22年(1889)	鍋山村大字殿河内となる	

表　文献にみる地名の変遷一覧表

これからみると、極く大まかに言って室町期の中頃「殿垣内」の地名が固定化したものが、戦国末期に「殿河内」に、近世初頭に「殿川内」にとそれぞれ変わり、さらに明治に至って「殿河内」に復したと考えてよさそうである。「殿垣内」の初見は、いまのところ応永17年（1410）であるが、その前の「戸野賀内」もこれの当字であろうか。

この地に対する支配関係の確立に伴って、まず「殿垣内」の地名が生まれ、その後「垣内」が「河内」「川内」に転訛したものと思われる。しかも、この地名の変転の節目にはこの地に対する支配者の交替が関与している節がうかがえる。

明治22年（1889）調整の「殿河内村切図」によると、現在の出雲井神社鎮座地の字名が「上殿河内」であり、ほかに「殿河内」の地名は見当らない。おそらく、この「上殿河内」に最初の土豪屋敷が構えられたことに由来するものであろう。また、付近には「前垣内」

「新垣内」などの地名も残っているところから、一族の居館が点在していたらしいこともうかがえる。

もっとも、地名の由来についてこのように速断するのには、いささかのためらいもある。この地名についての考察は今後の研究課題である。

2.「殿河内」への支配

次に、「殿河内」への支配がどのように及んだかをみていくことにする。

まず、最初に現われるのが「佐方文書」（前掲史料参照）の中に見える明徳3年（1392）の「京極高詮安堵状」である。「佐方文書」は、三刀屋氏（はじめ諏訪部氏）の一族で、のち熊本細川家に仕えた佐方家に遺る文書であり、その領有支配や三刀屋氏との関わりなどを知ることができる。三刀屋氏は、承久3年（1221）の「承久の乱」の功により西遷した新補地頭で、「殿河内」に隣接する三刀屋郷を約370年にわたり連綿として支配しつづけた出雲地方屈指の有力土豪である。佐方氏もその一族として来雲し、主として三刀屋郷内の「伊賀屋（伊萱）村」を本領としていたが、「戸野賀内」についても関わりを持っていたことがこの「佐方文書」によって知れる。

> 當国飯石郡多禰郷内戸野賀内分事、為給恩所相計世、任先例可致沙汰之状如件
>
> 明徳三年七月十一日
>
> （花押）
>
> 佐方九郎左衛門尉殿

京極高詮は、この年の5月、前年にいわゆる「明徳の乱」をひき起して失脚した山名満幸に代って、新しく出雲の守護となった人物である。この安堵状は、「明徳の乱」あるいはその後における、佐方氏の反山名を標傍し幕府に忠節を尽す旨の行動が、評価されたことによるものであろう。

この時には、三刀屋氏の惣領菊松丸（詮扶）も同様に三刀屋郷を安堵されている（三刀屋文書）から、三刀屋一族はあげて新守護京極氏に味方したようである。

この「戸野賀内」に対する佐方氏の支配が、今度はじめてのものかどうかについてははっきりしないものの、文面から見ると以前から領有していたものを改めて安堵されたようにも思える。

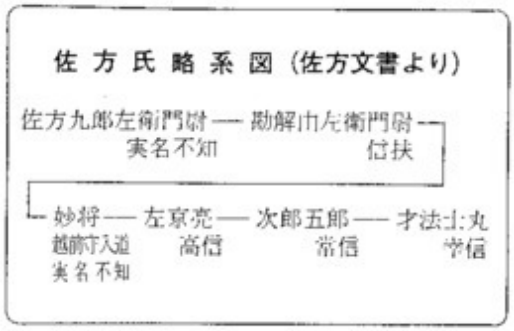
次いで、「佐方文書」に現われてくるのは応永17年（1410）京極高光の安堵状である。

> 雲州給恩多禰郷内殿垣内并福武村内楮町名大巻名等事、任親父妙将与奪之旨、
> 知行不可有相違之状如件
>
> 応永十七年四月十三日

（花押）

佐方左京亮殿

この佐京亮（高信）は、九郎左衛門尉の曽孫にあたり、同日付で本領の「伊賀屋村」ほかも安堵されている。



その後も「殿垣内」は、佐方氏の支配がつづいたが、「佐方文書」に見える「殿垣内」についての文書は、文明9年（1477）のものが最後である。

この頃から、出雲は京極氏の守護代尼子氏が次第に抬頭してきて、文明18年（1486）には京極氏に取って代り、出雲の実際的な支配者となった。そして三沢、三刀屋、赤穴といった有力国人たちを配下にしながら、ついには中国地方一円にまでその勢力を伸長させていった。

その過程で、殿河内を含む多禰郷は尼子氏の支配するところとなり、直接的には近臣多賀氏の領有となったようである。これは、尼子氏が勢力を拡大するうえで飯石郡の南北に君臨する赤穴、三刀屋両氏の間に、牽制の意味で楔を打ち込むためだったと思われ、その時期はおそらく文明年間の中頃であろう。文明5年（1473）「幕府奉行人奉書（法王寺文書）」は、多賀一族の飯石郡中部での押妨を停止しているから、かなり強引に事を運んだものとみえる。もともと多禰郷は、地名を姓とする多禰氏の支配するところであったが、南北朝期に姿を消し、闕所地となっていたものを新しく守護となった京極氏が手に入れたものである。尼子氏のとばっちりを受けた形で佐方氏の支配に終止符が打たれたものと思われる。

しかし、この多賀氏の支配も長くは続かず、永正（1504）のはじめごろ備後蔀山に本拠を置く多賀山氏にその領有が移った。多賀山氏がこの地に進出してきた経緯は不明であるが、同じく備後地方に勢力を張る山内氏（多賀山氏の惣領家）とともに、尼子氏の配下に入ったことへの見返りかも知れない。

この多賀山氏の時代に、いままでの「多禰郷」を改めて、私に「掛合（懸合、懸屋とも）郷」と称し、掛合日倉山に城を築き殿河内には出張（でばり＝出城）を設けたと言われている。

多賀山氏は、はじめ尼子氏の下にあったが、天文11年（1542）大内義隆の尼子攻めに加担、翌年大内氏が敗走するとそれに従って出雲の地を去った。

その跡は、尼子晴久のいとこで新宮党の誠久の手に移り、さらに新宮党が滅んだ天文23年（1554）ののちも尼子氏が支配し、最終的には永禄5年（1562）毛利軍の一員として富

田攻めに加わった多賀山氏が、再び帰り咲くまで続いた。

この天文12年から永禄5年までの尼子氏の支配は、隣接する日倉神社や「殿河内遺跡」のすぐそばに所在する「子守神社」の棟札によっても知ることができる。すなわち「天文二十二年癸丑十一月十八日、奉造立八幡宮雲州飯石郡多根郷内宮内村日倉別宮御造営成就砌」に大檀那として「源誠久同敬久」の名が見え、「子守神社」の棟札については、「雲陽誌」が「天文永禄尼子佐々木造立の棟札あり」と伝えている。

掛合郷に戻った多賀山氏の支配は、天正19年（1591）まで続いた。その間永禄6年（1563）には井上八郎右衛門が殿河内の内の三貫前を宛て行れ、また天正3年（1575）には備後福門原八幡宮が一貫前の地を寄進されている。

天正19年、毛利氏は大規模な領地換えを断行し、飯石郡内も赤穴氏を除いて三刀屋氏、多賀山氏などが防長へ転封となった。その跡へは、市川・小川・渡辺の各氏が入り、また毛利氏の直割領もできた。

貞享2年（1685）に作成された「八箇国御時代分限帳」によると、この時宛て行れた各氏の石高は次のとおりである。

1．3,196石6斗　　御倉入分
1．855石3斗7合　　市川助兵衛
1．640石5斗6升　　渡辺飛弾
1．421石5斗2升□合　　小川右衛門尉
1．1,668石5斗4升3合　　赤穴久内

この内、市川氏が三刀屋郷を小川氏が熊谷郷を宛て行れたことは、この前後の動向からほぼ推測できる。掛合郷については、明白な史料を欠くものの、毛利氏の直割領となった可能性が強い。

その後、毛利氏の支配は慶長5年（1900）、関ヶ原の戦いに敗れ防長2国に撤退するまでつづいた。

そして、そのあとへは遠州浜松から堀尾吉晴が雲隠24万石の領主として入国した。この江戸期に入ると領主による一国支配が確立し、郷制がくずれて郡単位に村々が治められるようになる。殿河内も飯石郡の中の「殿河内村」または「殿川内村」として明治時代までつづいた。この時期の殿河内村の規模は、安永2年（1773）で家数56軒、人口244人（男115人、女129人）、石高438石余（明暦2年－1656検地）である。

Ⅷ まとめ

殿河内遺跡は、御城山地区にあって北西の丘陵上に位置する御城山城跡との関連が強い居館跡と想定されていた地点である。発掘調査の結果は、柱穴群が検出され掘立建物跡も4棟が認められたが、出土遺物からして時代的な重複があり、中世のものと推定される1棟以外はより古い平安期頃かと推定された。遺物は土器片を主とするもので畑耕作土中からは近世以降のものが、耕作土下面では中世～近世初頭頃のもの、そして旧表土の上面からは古墳時代初め頃～平安期頃のそれぞれ時期がほぼ層位的に分布していた。この状況からみると古くからの居住区域であり、断続的に今日にまで及んでいる。必ずしも中世は盛況であったとは言い難いが痕跡はあり、青磁等も用いた居住区域とすると、当初の予想を否定するものではなかった。

この城跡はかつて大正年中に宇佐輔景の拠点と比定し、南朝の臣として顕彰したところであるが、大字殿河内地区全域をみわたしてこの城跡居住区の意味を想像するとき、数多くの不整合が感じられる。

中世集落に関与する地名の分布をみると、殿河内本郷に密で、太田・後山地区は粗である。寺院址、塚等の分布もほぼ同様な傾向を示し、特に正福寺宝篋印塔の如きはその製作において格別であり、雲南地方では類例がない室町期の優品であるなどである。

これらの状況はむしろ三刀屋川で区切られた北側に拠点を有し、隣接する多禰郷との境界に設けた殿河内奥城山（砦）との相関が思われ、ひいてはこれらは三刀屋氏の拠点であった宇古城地区との関連において考慮すべきものと思われた。

川より南側の当該遺跡とその丘陵上の御城山城跡は、むしろ丘陵続きである粟谷地区（三刀屋氏の一族による粟谷城跡を中心とする）との関連をこれから検討する必要があるように考える。

字「殿河内」は時代によってそれに当てる文字を異にし、「戸野賀内」「殿垣内」「殿川内」等が用いられ、しかも地域支配の変革とほぼ時を同じくして変化することも注目すべき点である。

つまり中世の殿河内地域はその範囲の変遷も含めて、中世の地頭支配区域の接点的位置に相当し、時代によって細部の境界や支配系列が交錯している。そしてそこには三刀屋川の流れが一つの重要な防塁としての意味をもちながら経過するものとみられるが、不明な点が多い。

これらの経緯を経て近世以降は三刀屋川を挟んだ南北両岸の本郷と御城山（後山）・太田地区を合して「殿河内」となっている。

また本郷地内には古刹禅定寺の東門のあったところとされ種々特色ある遺構がみられる。

禅定寺東門は字清水にあったと記録され、現在その位置に十王堂跡と称する龕に入った宝篋印塔が遺り、その山麓寄りの古路沿いには「荒神風呂」があって塚群が想定された。その内の2基からは和鏡・瓦器・刃・鉄鍋・玉石等が偶然出土しており、内容に不分明な点の多い室町時代の修法遺物であることが判った。

主 な 参 考 文 献

○郷土資料

編さん委員会	：三刀屋町誌	三刀屋町	1928年
編さん委員会	：掛合町誌	掛合町	1984年
野津天嶺	：飯石郡誌	飯石郡役所	大正6年
調査委員会	：三刀屋氏とその城跡	三刀屋城跡調査委員会	1985年
(複刻本)	：雲陽誌	雄山閣	1971年
(複刻本)	：雲陽軍実記	名著出版	1983年
調査会	：佐田町の民俗文化財	佐田町教育委員会	1982年
三刀屋町役場文書	：殿河内村切図	明治22年	
三刀屋町役場文書	：殿川内本田新田屋鋪坪名寄	嘉永4年	
三刀屋町原家文書	：飯石郡中独案内蝶	安永2年	

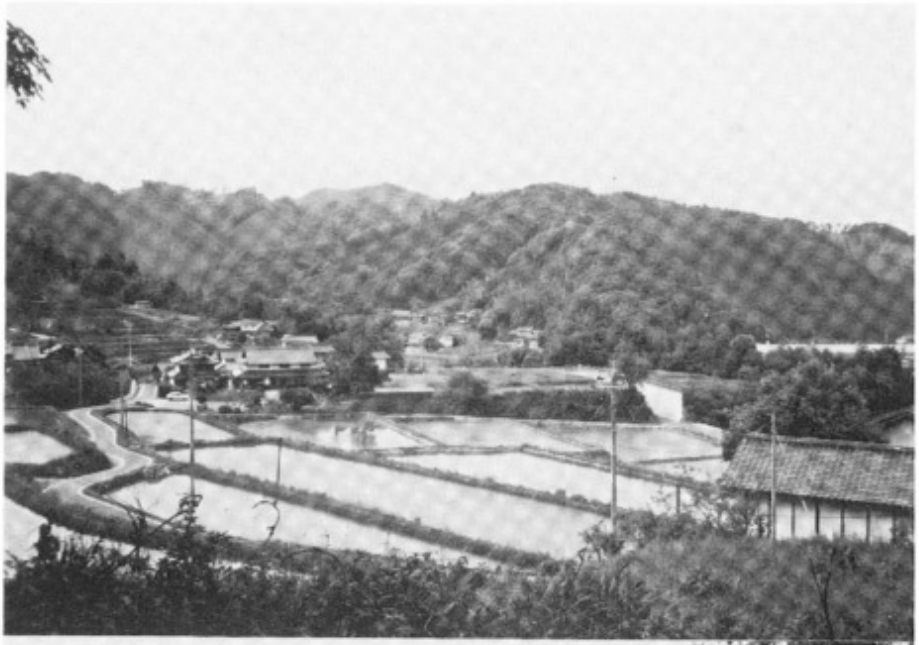
○主な図書・文献

坪井清足他	：	日本城郭大系別巻Ⅰ・Ⅱ		1981年
相賀徹夫他	：	城郭事典―城シリーズ10―	新人物往来社	1981年
藤井・市川	：	岡山の城と城址―岡山文庫19―		1978年
小和田哲男	：	城と城下町―歴史新書97―	教育社	1982年
内藤　昌	：	城の日本史―ＮＨＫブックス―		1982年
斉藤　忠	：	中世の考古学	名著出版	1983年
斉藤　忠	：	歴史時代の考古学―歴史公論66―		1981年
坂詰　秀一	：	仏教考古学調査法	ニューサイエンス社	1978年
矢部　良明	：	陶磁(中世編)―日本の美術236―	至文堂	1986年
中野　政樹	：	和　鏡―日本の美術42―	至文堂	1969年
川勝政太郎	：	石造美術入門	社会思想社	1967年
桑原　英二	：	まぼろしの戦国城下町	(私家版)	1970年
井上　光貞	：	歴史散歩事典	山川出版	1982年

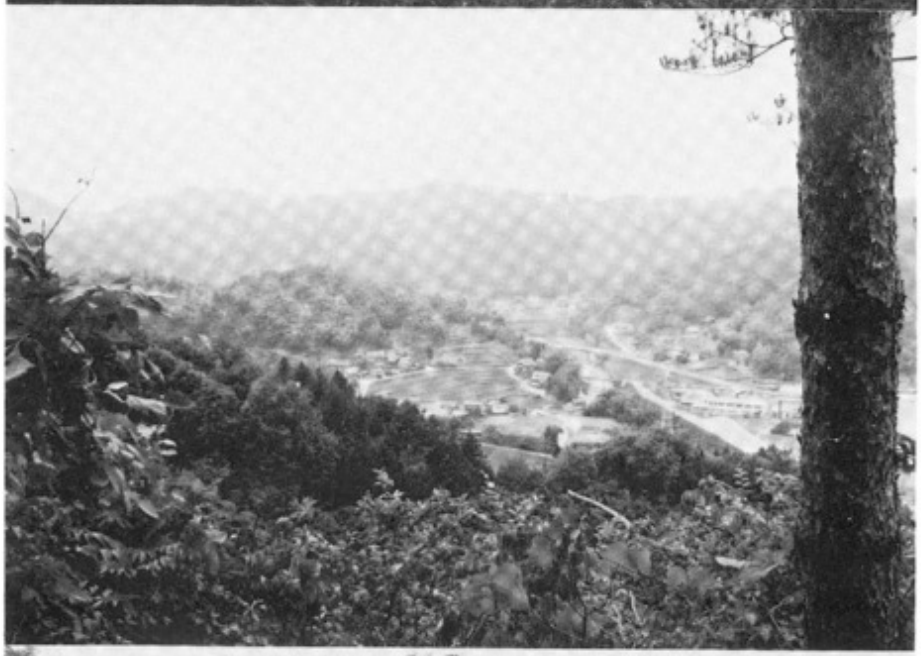
○調査報告書

三刀屋城跡調査報告書Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ	三刀屋町教育委員会	1982～84年
新宮谷遺跡発掘調査報告書	広瀬町教育委員会	1982年

郡山城跡千浪郭群の発掘調査　　広島県吉田町教育委員会　　1981年
三宅　博士　：「土師質土器を伴う石鉢について」—島根考古学会誌Ⅱ—　1985年
水野　正好　：「近世の地鎮・鎮壇」—古代研究28・29—　1984年
東京国立博物館：収蔵品目録（金工、刀剣、陶磁、漆工、染織）　1954年
服部　英雄　：「小字地名による中世の村の復元」—歴史公論86—雄山閣　1983年
池渕　彦助　：出雲に於ける五輪塔并に宝篋印塔尋ね歩記（稿本）　1982年



1、遺跡全景



2、遺跡遠景

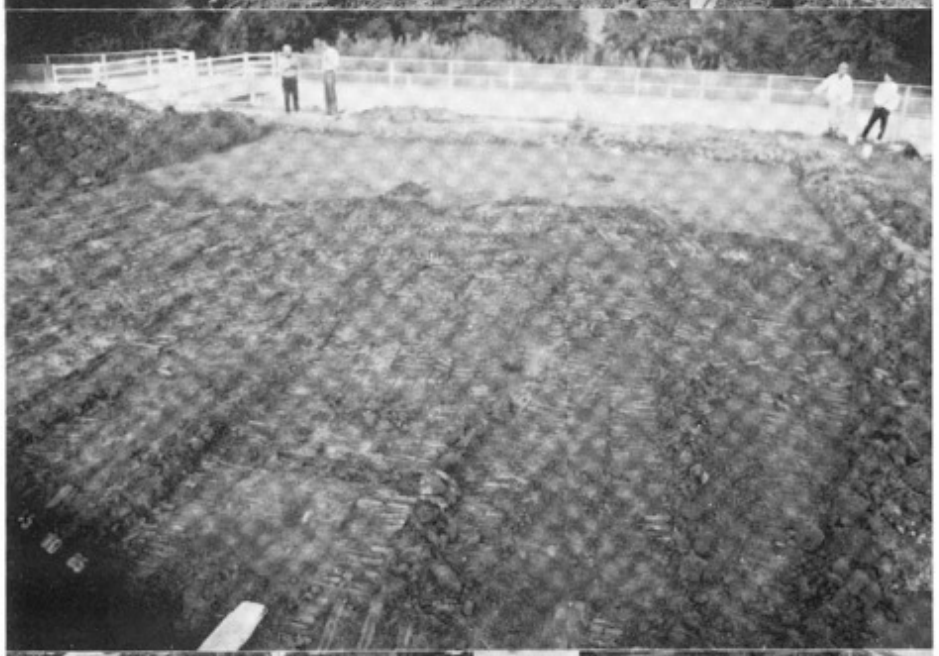
3、発掘地点と御城山城跡

4、第一地点トレンチ

5、同　上

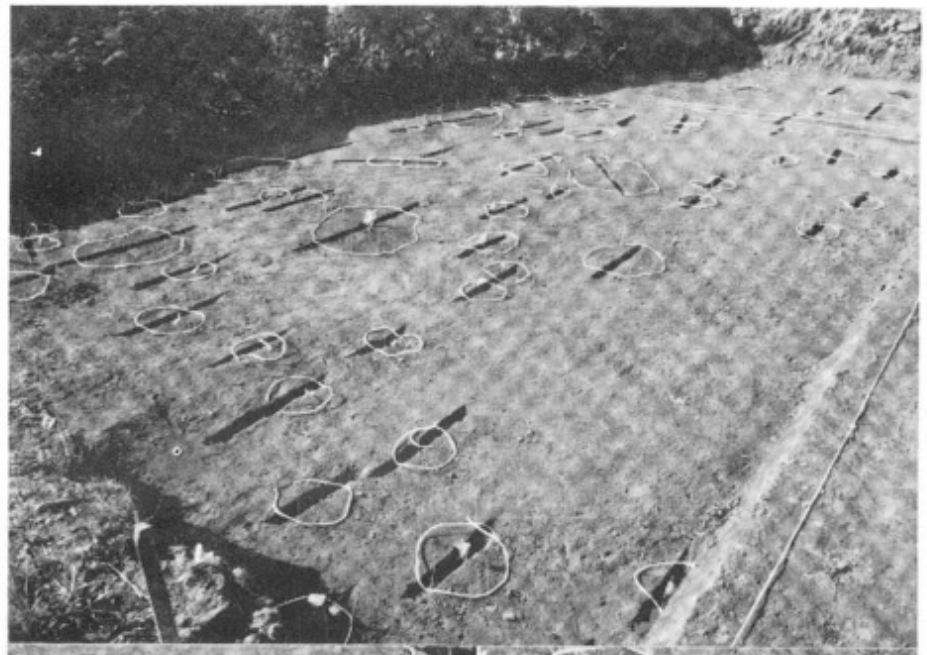
6、第二地点トレンチ

7、重機による耕土排除

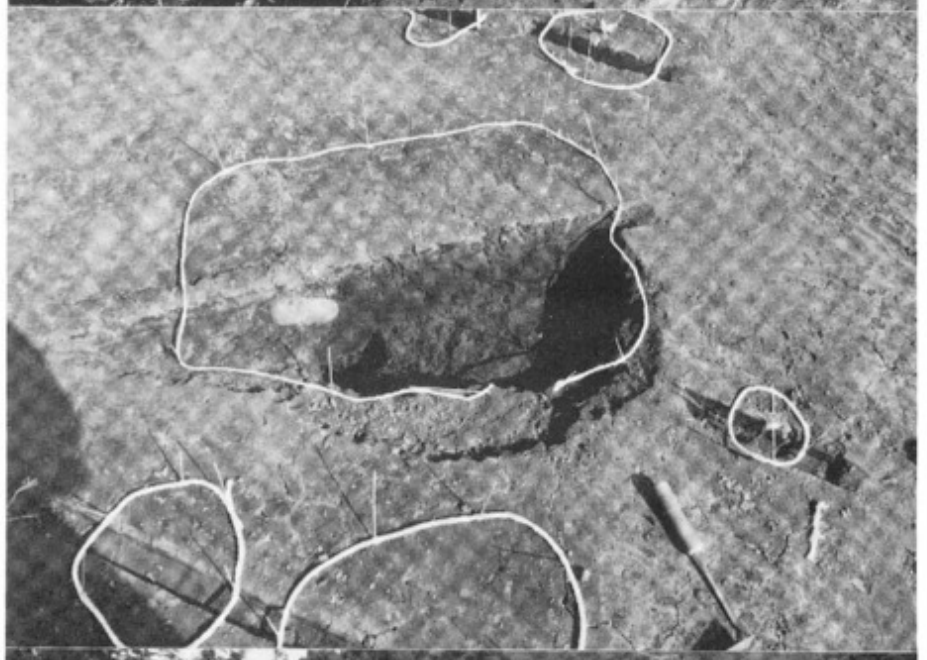


8、同上

9、遺構検出



10、ピット裁ち割り状況



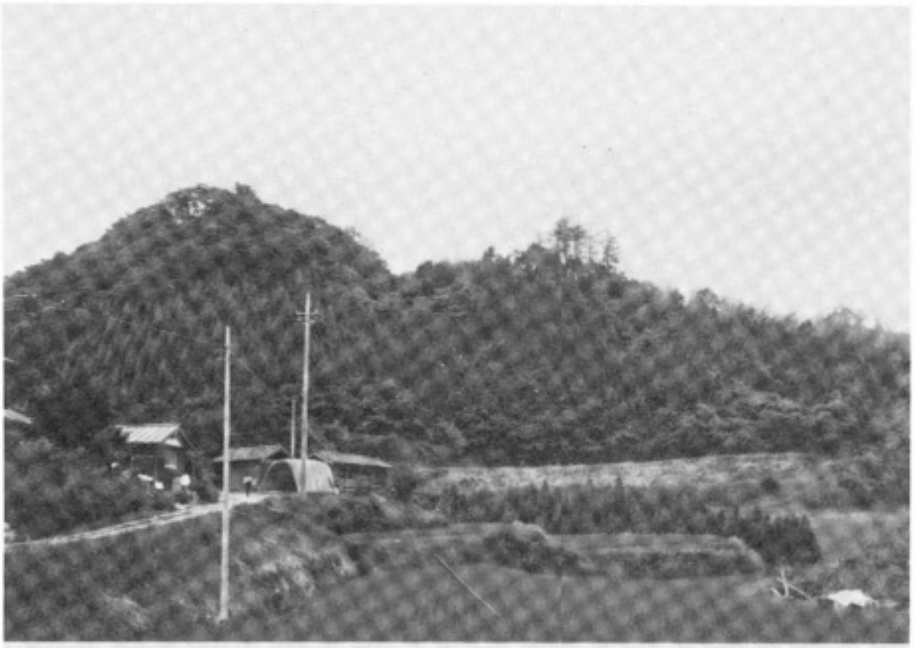
11、同　上（部分）

12、重機による埋戻し

13、御城山城跡主郭

14、城跡古路

15、城跡実測作業

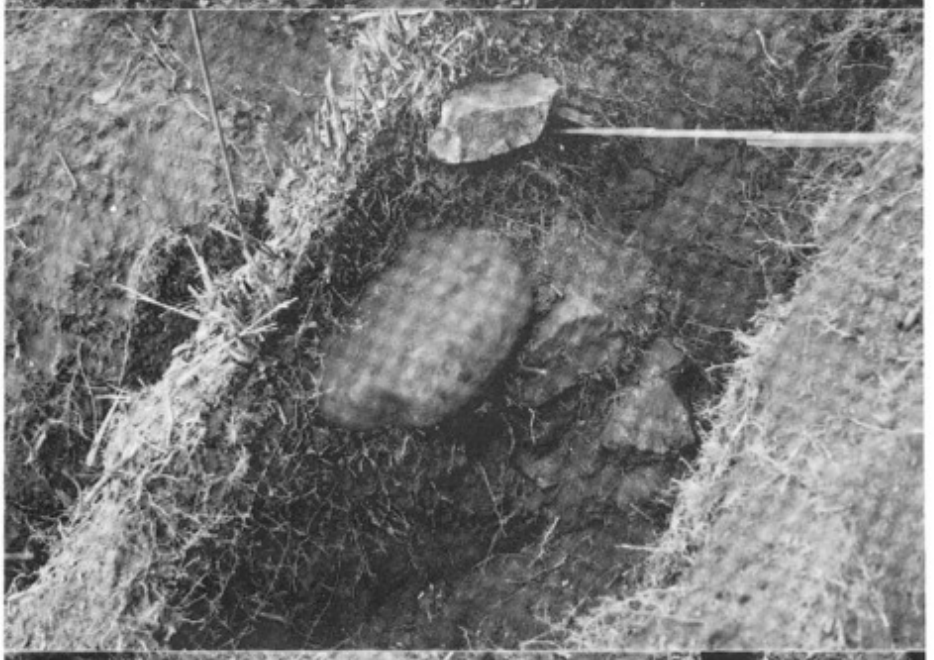


16、殿河内奥城山

17、同　上

18、殿河内奥城山頂部より　禅定寺を望む

19、清水荒神塚近景



20、同上埋納壙

21、同　上（完掘）

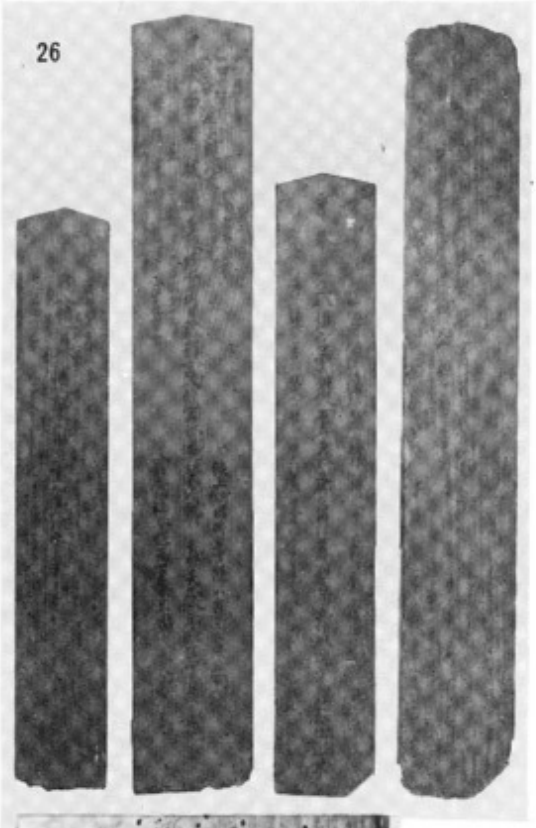
22. 椎ノ木上古墓 →

23. 正福寺の塔 ↑

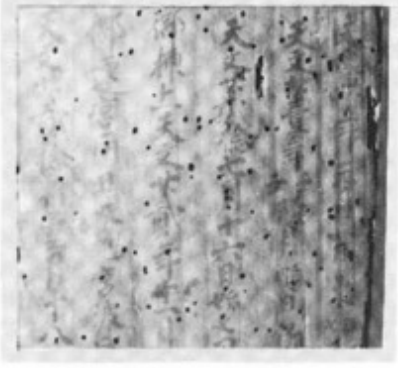
24. 字極楽の塔 →

25、清水十王堂の塔 →

日倉神社収蔵品


26

28


27

29

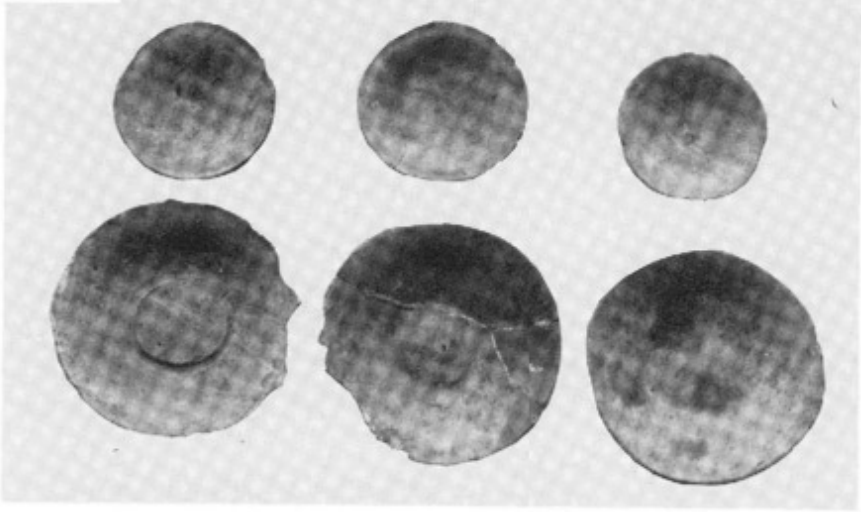
32

31

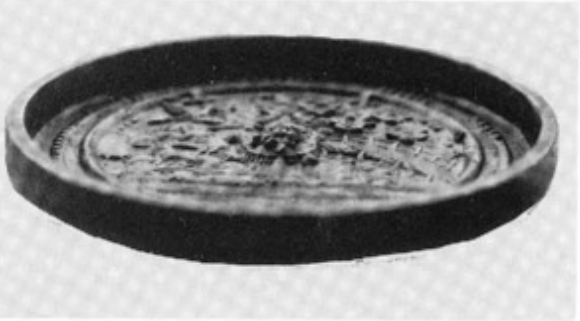
30

清水荒神塚出土品

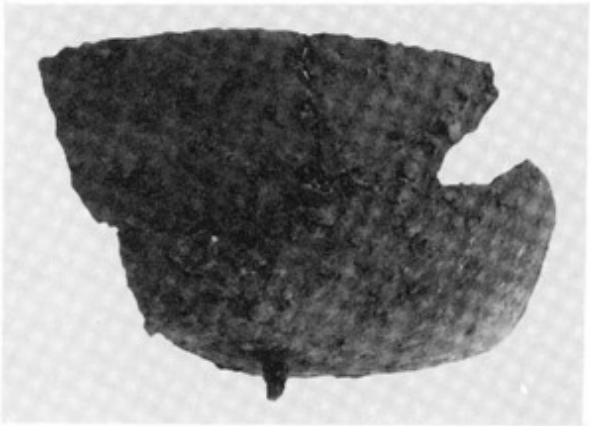
33

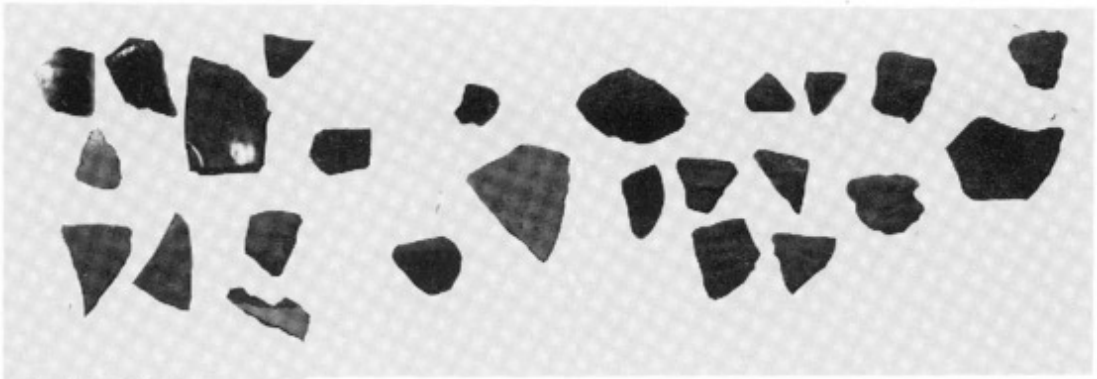


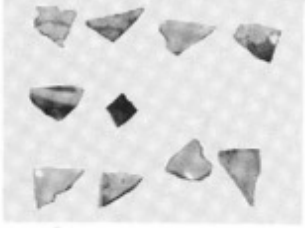
34



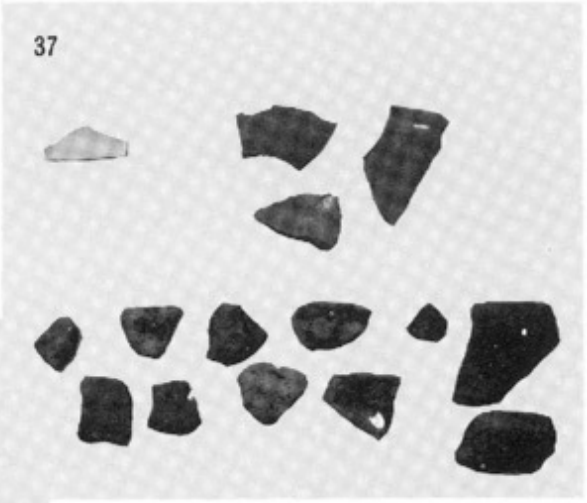
35



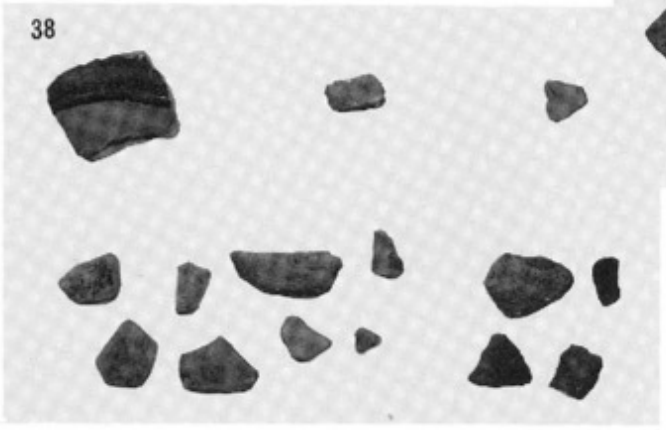




36



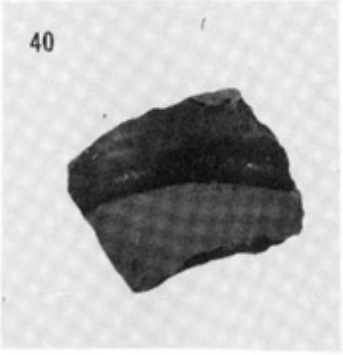
37



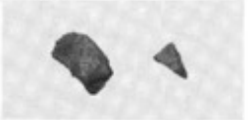
38

39

41



40



42

43

殷河内遺跡出土土器片

36. 耕作土中
37. 黒色土中
38. 黒色土下面
39. 青磁片
40. 瀬戸天目片
41. 古伊万里片
42. 古唐津片
43. 灰釉陶片

殿河内遺跡発掘調査報告書

昭和61年3月

発行　三刀屋町教育委員会
島根県飯石郡三刀屋町三刀屋944

印刷　㈲木次印刷
島根県飯石郡三刀屋町三刀屋1635